



付記 一原始、古代、中世の西高屋を概略しておきましょう一

1、高屋の成り立ち

○弥生時代の後期(約二千年前)の遺跡(住居跡や墳墓群)が現在も多く発見されている。その数は、西高屋だけでも70カ所から80カ所とも言われている。すでに多くの人々がこの地に住んでいたのがわかる。一例として、杵原の西本遺跡群と高美が丘の東広島ニュータウン遺跡群で発見された住居跡と墳墓の数を示してみよう。住居跡で、西本遺跡は60個、東広島ニュータウン遺跡では180個。墳墓では、西本遺跡が290個、東広島ニュータウンでは175個あった。両遺跡の合計は、住居跡が240個、墳墓が465個となる。

2、白鳥古墳と高屋の由来ー古墳時代4世紀後半

○**白鳥古墳** ①明治43年(1910年)白鳥神社修築の際に白鳥古墳発見。竪穴式石室の中に、三角縁神獣鏡2面、碧玉製勾玉、素環頭太刀一口(約60cm)、埴輪などが出土した。

②被葬者は、4世紀後半の大和朝廷と関わるこの地方の首長とみられる。大和朝廷ができるのは、4世紀中頃のことである。

③景行天皇43年、天下に号令して諸国に白鳥神社を建てさせた。その時安芸国において建立された社だといわれている。

④白鳥伝説が生まれる。古事記(712年)に倭健命(ヤマトタケルノミコト)が記述される。

○**高屋の由来** 高屋の名は、古代朝廷の屯倉(みやけ)のある所から発生したといわれ、その屯倉を治めるために入って来た役人を高屋連(たかやむらじ)と呼んでいますが、白鳥古墳はそうした白鳥伝説に象徴された朝廷権力につらなる彼らの長の墓ではなかっただろうかと考えられます。そして白鳥飛翔伝説(大和ー河内ー讃岐ー安芸)は、大和朝廷の権力波及の道順を示すものではないでしょうか。

これら、民族詩ともいべき伝承物語は、いかに時代が進歩しても、いい継ぎ、語り継ぎして残していきたいものです。
(高屋町誌・飯田米秋)

3、巨大神殿跡と白鳳文化ー飛鳥時代7世紀末(680年～710年)

①西本6号遺跡(現在のあすかパーク団地内)の空中写真。南北92m×東西80m=7360㎡の大垣を廻らせた壮大な敷地の神殿が造られた。

②出土品:金銅製の毛彫りの馬具、墨書土器(解除はらえ)、硯、須恵器、土師器(甕、甑がほとんど出土していない。食事の器はたくさんあるが、煮炊きするものはない。)

③時代:天武天皇・持統天皇(672～707年)時代の大社の跡。(白鳳文化)

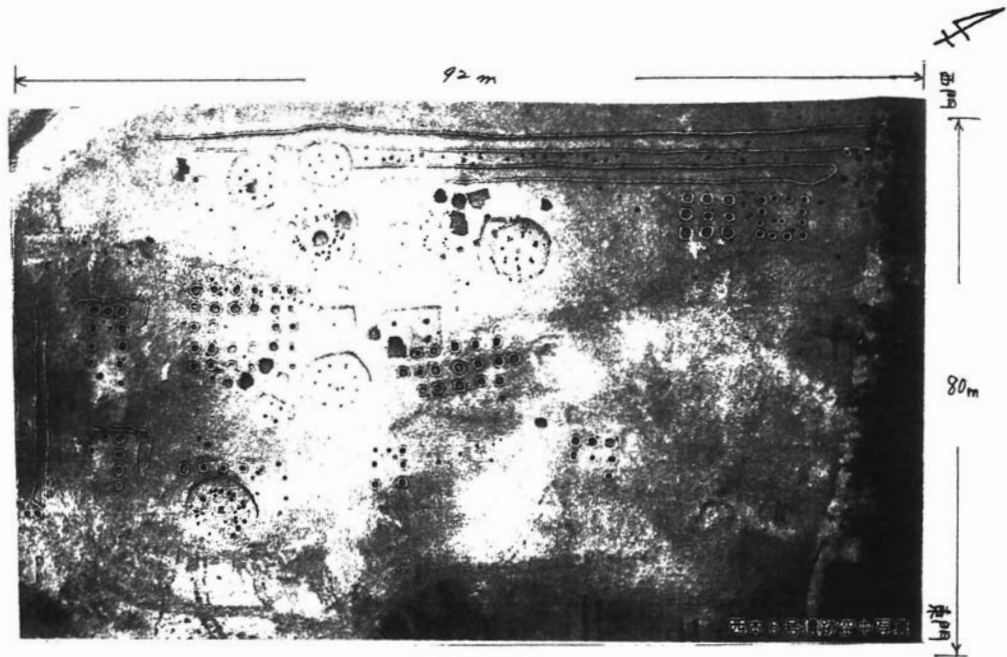
④特徴: i 神明造の独立棟持柱付き掘立柱建物(代表は伊勢神宮の本殿)の高床神殿、神事祭儀の直会殿(四面庇建物)、着到殿、祭器庫(祭器具を収める宝殿)、平屋建ての管理人の宿舎など。

ii 村に作られたような神社ではなく、造営に際して中央から技術者が派遣されたり設計図が配布されるなど、中央の関与が予想される。

iii 当時としては、全国最大級の神社であったと考えられる。

iv 天武朝にはじまった「諸国大祓おほはらえ」に関連している神殿かもしれない。安芸国の国造・凡直おほしのあた氏が行なう大祓の儀式が行なわれたともいわれている。

航空写真図



4、壬生忠見と足山の歌碑—平安時代 10 世紀後半

壬生忠見の石碑：藝藩通志に、賀茂郡の古蹟名勝の筆頭にあげている「安志乃山」は、壬生忠見のただ一首の歌を縁として、その名を後世に伝えた。壬生忠見は、忠岑の子で共に三十六歌仙に選ばれている平安時代の代表的歌人である。忠見はおそらく官命により筑紫へ行く途中、高屋を通過して「あしの山」の一首を残したのだろう。「つくしにくだるに あきの國 あしの山を 雨のふるに こゆるとて 一たびも まだみぬみちに まどわぬは 雨のあしこそ 指南なりけれ」(東広島の歴史事典)

杵原の二百石谷の最奥、楽市八幡神社のさらに北側の農免道路沿いの畑の中に石碑が建てられている。

5、天養元年の不思議—平安時代 12 世紀半ば

高屋の不思議—創建を天養元年(1144年)とする伝承をもつ寺社が三カ所ある。

①杉森山西福寺 阿弥陀堂

大字稲木鹽辛にあり、廃西福寺跡なり。西福寺は杉森山と號し天養元年の創立にして、高野山の僧信隨の開基なり。何の世にか廃せしを天正十年僧義天再興して堂舎を建立せしも、文禄より正徳の比まで住僧中絶して亦廃圯す。享保六年里民議して遺址に三間四面の堂宇を建立し真宗の説教所とす。されど狹隘にして不便を感ずること多ければ、安政三年更に改築して四間半に三間半となせりといふ。(賀茂郡志 p467)

この西福寺跡周辺には、鎌倉時代の末期から南北朝期(1322年～1340年)にかけて行賢という僧侶が多く供養碑(板碑)を残している場所でもある。

②西八幡神社 稲木明神

由緒 1144年(天養元)3月三好吉明の祖先兵衛晟光という者が私林に祠を建てて勧請し、五穀豊穡、村内安全を祈願したと伝える。その後村人相談の上、社殿を建立し村中の鎮守神となった。旧稲木村にはかつて東西二社の八幡宮があり、西の社は大きく、東の社は小さかったと「藝藩通志」に記されている。1907年(明治40)字門前の杉平神社、同じく境内社夢城神社、同栗本神社、字近信の東八幡神社を本社に合併した。



③枚森八幡神社

由緒 1140年(保延6)3月、**今井兼久の祖先吉房**という者、私林に祠を建てて宇佐八幡宮の分霊を勧請し、朝夕礼拝崇敬していたところ、1144年(天養元)杉森の城主下総守参拝して社殿を建立し崇敬したと伝える。降って1600年(慶長5)9月当村の民、七左衛門の祖今井兼久が祈願することがあって当社に通夜した所、神より杉の葉を賜うと夢に見たことにより、杉森八幡宮と称えたという。1908年(明治41)杵原の榎が坪八幡神社、石挟八幡神社、石原八幡神社、山手雨請神社、山手荒神社を本社に合祀した。

④杵原薬師堂の「線刻十一面観音鏡像」

銅鏡形の銅板に蹴彫で十一面観音が単独に描かれたもの。様式上12世紀半ばに制作されたものと推定されている。十一面観音は蓮華座に座し、右腕を膝前におろし、左腕は水瓶を載せる蓮華をとって腕前にたてている。

12世紀半ばに制作された「線刻十一面観音鏡像」は、どこかの女性の愛用品であったものが、誰かの手によって、この高屋に運ばれたものか、あるいは愛用していた女性自身が、この高屋の地を訪れ、住み着いたものなのか、様々な想像をかきたてる名品である。

(平成26年東広島市重要文化財指定)

この杵原の薬師堂は、今井氏の敷地内にある。今井氏は、平安時代後半頃から朝廷の食糧を管理する役所大炊寮の長官大炊頭おおすいのかみ(貴族)を世襲していた中原氏を出自としている。中原氏は、大炊寮の荘園である「高屋保」の領家であり、その関係で高屋保に入ってきたものと想像できる。だとすると、その「線刻十一面観音鏡像」は、高屋保が朝廷大炊寮の荘園であったことを暗に物語るものでもあるだろう。

6、朝廷の大炊寮の領地「高屋保」

○律令体制の確立後、高屋は「和名抄」記載の賀茂郡高屋郷に編入される。平安時代後期までは、国衙領であったと考えられ、平安時代末期には朝廷の大炊寮の便補保(荘園)として「高屋保」(朝廷の荘園)が成立したとされる。高屋保の領家は大炊寮の寮務を管掌した貴族の中原氏であり、鎌倉時代から室町時代の15世紀中頃までは世襲されていて、高屋保の領主といわれている。

○この地域では、在地の小豪族が並立しており、領家が崇敬する格式の高い神社を中心にして結束していた。高屋保では、白鳥神社に土地を寄進することで宮司・有力豪族(武家や百姓)などの一族同志が共存しながら領家中原氏の支配下にあった。この荘園の管理者(雑掌)は、有力豪族の南氏(中島に屋敷跡がある)が務めていたといわれる。

7、僧行賢について

鎌倉時代末期から南北朝期前半にかけて、行賢という僧侶が稲木に住んでいたことが多くの石碑からうかがえる。稲木から大島にかけて板碑という供養碑が多く残っていて、約20年間この地で宗教活動をしていたことがうかがえる。その人物像については確かなことは分かっていない。

主な「僧行賢関係遺品」をあげておこう。

<稲木西山谷>

- 西福寺跡大日種子板碑「右爲入蓮 正中二(1325年)」(県重要文化財)
- 西福寺跡大日種子板碑「法華経譬喩品」(県重要文化財)
- 西福寺跡石造地藏菩薩立像「暦応四(1341年)」(県重要文化財)
- 板碑2基それぞれ梵字の下に、「暦応三(1340年)」「暦応四(1341年)」
- 他に無銘の板碑6基



<稲木栗本廃長楽寺跡>

○石造不動明王立像「元亨二（1322年）」（県重要文化財）

○石造多聞天立像（県重要文化財）

<中島西品寺境内>

○石造水槽「元亨二（1322年）」（県重要文化財）

<大畠民家敷地内>

○二尊種子（不動明王・大日如来）板碑「暦応三」

8、東国武士団の平賀氏が地頭として高屋保にはいる

○在地の小豪族が連立しているこの高屋保へ、東国武士団（出羽国在住）の平賀氏主従一族が地頭として入部してくる。鎌倉時代後半元寇後の弘安年間（1278～1287）のことである。

○鎌倉時代末期（1333年まで）から南北朝期（1336年～1392年）の動乱の中で、平賀氏は足利尊氏らの北朝側として戦い、しだいにその名を挙げていく。

○地頭としての平賀氏は、高屋堀に居を構え、白鳥神社勢力と在地豪族に対して年貢などの徴税を迫りながら、徐々にその勢力を拡大していくが、15世紀の中ごろまでは高屋保の西側（西高屋）の勢力の抵抗にあっていたと思われる。

①一例として、平賀氏の一族が大畠氏を名乗り、杵原西本の古慈喜城を拠点にした。さらに家臣の桧山氏は、桧山村の徳満城に入ったといわれている。

②溝口は平賀氏（一族の木原城主の木原保成）と白鳥神社勢力の拮抗していた地域とみられ、木原城から南下してきた木原氏は、五十石村に水牢を作ってその力を示そうとしていた。

○戦国の世（応仁の乱1467～1477年以後）になるに従って、平賀氏の勢力は増していき、高屋保の領家中原氏は地頭勢力に圧倒されて、幕府に替地を求めるにいたる。

○かくして西高屋の在地勢力は、平賀氏の支配下に入ること、下剋上という戦国の動乱の渦中に巻き込まれていくのである。



年 表 — 大炊寮領「高屋保」の変遷 —

(注) 高屋保とは、現在の高屋町の内、造賀と小谷を除いた地域を想定しています。

年表中の「高屋余田」「高屋本保」とあるのは、高屋保のうち「高屋余田」は西高屋地域を、「高屋本保」は東高屋地域を示しています。

大炊寮領高屋保の変遷

年 代	高 屋 保 (西部・東部)	
平安時代後期	領家 大炊寮大炊頭中原氏 高屋保雑掌 (居館は御園生城か?) 在地豪族の中心は南氏?	
1140年 (保延6)	○杉森八幡神社 今井吉房私林に祠を建て宇佐八幡宮の分霊を勧請	
1144年 (天養元)	○杉森の城主参拝して杉森八幡神社社殿を建立 ○杉森山西福寺 稲木村西山に高野山の僧信隨が開基 ○稲木明神 三好兵衛晟光私林に祠を建てる ●杵原村正原の薬師堂 先刻十一面観音鏡像 ●郷村の阿弥陀堂 (東田遺跡)	
1184年 (元暦元)	●1月木曾 (源) 義仲とともに滅んだ今井四郎兼平の一族の一部は、安芸国高屋保杵原村に落ちる。今井氏の出自は大炊寮大炊頭中原氏で、大炊寮領高屋保の在地豪族として既に杵原村に在住していた今井氏の縁を頼ったものと思われる。	
1185年 (文治元)	≪平氏滅亡≫	
1192年 (建久3)	≪源頼朝 征夷大將軍となる≫	
1221年 (承久3)	≪後鳥羽上皇 承久の乱≫	
1222 ~ 1223年 (貞応年間)	●高屋保は東寺造宮領となる	
年 代	高屋余田 (高屋西部地域)	高屋本保 (高屋東部地域)
1274年 (文永11)	≪元寇 (文永の役) ≫	地頭職・平賀氏 高屋保高屋堀に入部 ○平賀氏3代平賀惟長 安芸平賀の初代・出羽国在住・高屋へ代官派遣
1278年 (弘安元)		○4代平賀惟致 (惟長弟・羽州在住)
1281年 (弘安4)	≪元寇 (弘安の役) ≫	
1297年 (永仁5)	●この頃石打八幡神社 村民は石清水八幡宮より分霊を勧請し石打原に建立 (氏子は宮領村、中島村、郷村、溝口村、重兼村、貞重村)	○5代平賀貞泰 (惟致長子・羽州在住)
1300年 (正安2)		○6代平賀惟藤 (貞泰弟・羽州在住)
1318年 (文保2)		○7代尼キャウカン (貞泰女) (安芸の尼御前・高屋来住)
1319年 (文保3)	後宇多上皇の院宣「高屋余田は国衙領とされ東寺に安堵し、東寺造宮を催促。高屋本保は勘落を免れる。」	
1321年 (元亨元)		○8代平賀兼宗 (貞泰従弟・羽州在住) 高屋保を譲渡
1322年 (元亨2)	○僧行賢 稲木村栗本の長楽寺に不動明王立像他	



年 代	高屋余田（高屋西部地域）	高屋本保（高屋東部地域）
1322年（元享2）	○僧行賢 水槽（手水鉢）（現西品寺）	
1325年（正中2）	○僧行賢 稲木村西山供養碑（為入蓮）	
1333年（元弘3）		○平賀兼宗 足利尊氏の下で転戦
1336年（建武3）		○平賀兼宗 安芸国兇徒退治に戦功 平賀共兼（兼宗の妾腹の長子）を代官として高屋に派遣・足利尊氏の九州西下に従軍、地頭を名乗るが後貞宗に攻められ没落する
1338年（建武5）		○9代平賀貞宗（兼宗次男・羽州在住） 河内国兇徒退治・平賀氏の入野郷押領で東寺は幕府に訴状（高屋堀村、高屋東村から入野郷に侵出）
1340年（暦応3）	○僧行賢 大畠の二尊種子板碑	
	○僧行賢 稲木西山の二尊種子板碑	
1341年（暦応4）	○僧行賢 稲木西山の地藏菩薩他	
1344年（康永3）	○大炊寮雑掌と地頭平賀氏の争いで大炊寮勝訴	●高屋保の西部にも侵出 地頭の検断と徴税による国衙領への侵出が横行する。
1347年（貞和3）	○大炊寮使いの江平次 高屋保の年貢を運び上洛する（師守記）	
1354年（文和2）		○平賀貞宗、足利尊氏より入野郷を充行われる。
1385年（至徳2）		○10代平賀弘章（高屋在住） 高屋保の半分（東部）、入野郷半分（南方）の地頭職を譲渡される
1388年（嘉慶2）	○入野時宗（10代平賀弘章弟）高屋保の半分（西部）、入野郷半分（北方）の地頭職を譲渡される	
1403年（応永10）		○安芸国守護山名満氏が御園生城を攻撃する・11代平賀共益（平賀弘章の次男）他一族の多数が戦死 ●応永の安芸国人一揆契状（33名の同盟）で平賀氏を側面支援
1412年（応永19）	○12代平賀頼宗 高屋保全部譲渡	○12代平賀頼宗（平賀弘章の孫、共益の長子）・御園生城居住 高屋保全部、入野郷南方譲渡される
1413年（応永20）	○平賀頼宗弟鶴丸 周了と改め杵原村西本に西本坊を開基（一族の弔いか） （杵原村今井氏は平賀氏の下に就く）	



年 代	高屋余田（高屋西部地域）	高屋本保（高屋東部地域）
1417年（応永24）	○ 入野時宗 平賀本家に敵対し、高屋保の西部の三分の一（大畠?）を相国寺鹿苑院天龍寺僧鄂隠に譲渡、三分の二（稲木周辺?）を同じく僧慶仲周賀に譲渡（幕府はこれを安堵する） ○稲木村門前の長福寺は周賀相伝の寺といわれる（稲木門前の毘沙門堂周辺?）	
1431年（永享3）	○藤原清秀 私林に小祠を築く（9月）	
1433年（永享5）	○鄂隠の所領手続き文書は平賀頼宗にわたされ、高屋保西部の三分の一（大畠?）は平賀氏に戻る	
1438年（永享10）	○ 木村兵庫時成 藤原清秀と相談の上、自分所有の山林を寄進し社殿を建立。 時成八幡宮 と称し大畠村鎮守神となる（9月）	
1449年（宝徳元）	●大炊寮大炊頭中原康富は平賀氏との争いに手を焼き、幕府に替地を乞う	
1451年（宝徳3）	○ 大畠宗仲 （13代平賀弘宗弟）杵原村西本の 古慈喜城 に入る？	○ 13代平賀弘宗 （御園生城居住）惣領職譲渡（弟宗仲は大畠氏を名乗る）
1470年（文明2）	○ 時成八幡宮 暴風雨で倒壊した社殿を平賀氏家人の 桧山淡路 が再建	
1471年（康正元）	○ 平賀弘頼 高屋保地頭職譲渡される ●大炊寮雑掌・白鳥神社勢力の抵抗あり（稲木村は相国寺・天龍寺領として平賀氏は侵出していない?、宮領村、中島村、郷村、溝口村、重兼村は白鳥神社と領家大炊寮の支配下にあったか?）	○ 14代平賀弘頼 （御園生城・弘宗長子弘資病弱で弟弘頼相続）高屋保・入野郷南北地頭職譲渡される
1492年（明応元）	○ 平賀弘保 高屋保地頭職相続	○ 15代平賀弘保 20歳で高屋保全部・入野郷全部を相続（居城御園生城後に 白山城 ）
1496年（明応5）		○田万里へ出兵・小早川氏と小競り合い
1503年（文亀3）		○平賀弘保 白山城 築城
1510年（永正7）		○平賀弘保 代官平賀頼次に東高屋の 福岡八幡宮 、 田万里八幡宮 の建立に着手させる



年 代	高屋余田（高屋西部地域）	高屋本保（高屋東部地域）
1511年（永正8）		○平賀氏は大内義興の下、船岡山の合戦で鬼平賀の異名をとる
1523年（大永3）		○平賀弘保 頭崎城築城 弘保の長子 16代平賀興貞 が入城（西条鏡山城が尼子氏によって落城）貞重村は平賀氏の支配下になる
1530年（享禄3）	○平賀氏重臣の <u>名井光叶</u> の兄光秀が杵原で自刃（梵字岩）（尼子氏に属している平賀氏は大内氏の圧力が強く、その帰属に苦しんでいる最中の出来事）	●戦国大名大内氏と尼子氏の挟撃で平賀氏は苦悩する
1532年（享禄5）	○大畠の <u>大日種子板碑</u> （清観古墓） 浄祐・妙珍・妙林の供養碑（享禄5年4月19日、大内方の志和東村の石井元家は、平賀氏被官の <u>桧山十郎左衛門</u> を打ち取っている。この板碑は桧山一族の供養碑か？）	
1535年（天文4）		○ 平賀弘保 は尼子氏を離れ大内氏に復す。弘保の長子 平賀興貞 は頭崎城で尼子方として父弘保と相争う
1536年（天文5）		●東高屋村の光乗寺を開基した僧浄祐と清観古墓の浄祐は同一人物かどうか不明
1540年（天文9）		○ 毛利元就 が頭崎城に対して造賀より夜襲をかけ落城させる
1543年（天文12）	○平賀弘保 家臣 <u>桂保和</u> に中島村の実重・京免などを与える ●平賀弘保は <u>白鳥神社</u> を再建（白鳥神社の祭礼を福岡八幡神社で執り行うことに抵抗された結果）	
1551年（天文20）		○毛利氏 18代平賀広相 を以て平賀氏を再興する
1552年（天文21）		○平賀広相 小早川隆景と兄弟の契りを結ぶ（高屋堀の七社神社）
1560年（永禄3）	○中島村の <u>南兵庫正</u> 木原美濃守保成の仲介により立花村（現安芸津村）に住居を移す（白鳥神社勢力の分散化？）	●1558年（永禄1）平賀弘保死去84歳



年 代	高屋余田（高屋西部地域）	高屋本保（高屋東部地域）
1561年（永禄4）		●平賀広相、高屋東福岡八幡神社を再建する
1566年（永禄9）		○平賀広相、雲州富田月山城を攻める
1567年（永禄10）		○ 19代平賀元相 家督を継ぐ
1573年（天正1）		《室町幕府滅亡》
1585年（天正4）	○中島村西品寺の平賀専正宛に、豊臣秀吉の九州征伐に従い西下する文書が本願寺嗣法教如より届く	
	○溝口村の <u>大福寺</u> （白鳥神社の別当寺・社領二百石）は、白山城下に移され <u>西福寺</u> と寺名を改める	●白鳥神社の最大勢力である大福寺を平賀氏の膝元に置くことで、抵抗勢力の分散を図ったか？
1600年（慶長5）		《関ヶ原の戦い》
		○平賀氏、関ヶ原の戦いにより18,383石の領地を没収され、周防国都濃郡秋穂村へ移り、4,000石を領す。多くの家臣は高屋に帰り帰農する
1603年（慶長8）		《徳川家康 江戸幕府を開く》

この年表の作成にあたって、主に「東広島の古代中世」（東広島郷土史研究会 1978・7）、「高屋町誌」（昭和48年7月25日発行）、「高屋町誌 中古篇」（広島県賀茂郡高屋町文化財保護委員会 代表著者 名井秋人 昭和32年9月15日発行）を参考にした。



付 録 — 黄色の看板を発見！西高屋に 61 ヲ所設置 —

2014年（平成26年）3月に、「ふるさと西高屋を歩く」の初版を発刊しました。それと同時に、西高屋の各地に伝わる話や歴史を歩きながら楽しんでもらいたいという思いから、史跡の案内看板を設置する作業を行ってきました。

その西高屋史跡案内看板は、現在西高屋地区内に61ヶ所設置しています。この黄色い看板には、史跡や見どころの案内文として、西高屋地域で昔から伝承されている事柄や歴史を簡潔に記述していますが、ウォーキングなどでその場所に行かなければ読むことができません。

そこで、「ふるさと西高屋を歩く」の改訂版第三版を出版する際、「西高屋史跡案内看板－解説文一覧－」を別冊としていましたが、このたび第四版を発行するに際して、その「西高屋史跡案内看板－解説文一覧－」を本冊子に一括して掲載することにしました。そこで、この「ふるさと西高屋を歩く」一冊を携帯して、史跡巡りを楽しんで頂ければと思います。

この冊子がこの地域を一層知るきっかけになれば幸いです。

2021年（令和3年）2月
ディスカバー高屋 代表 井上泰秀

「西高屋史跡案内看板－解説文一覧－」

目 次

注) 「ふるさと西高屋を歩く」の表紙裏面に掲載してある地図上の番号①～⑥1と、案内文の番号①～⑥1は一致しています。

看板設置場所 ①～⑧ …… 解説文一覧 (1) ……	55
看板設置場所 ⑨～⑯ …… 解説文一覧 (2) ……	56
看板設置場所 ⑰～⑳ …… 解説文一覧 (3) ……	57
看板設置場所 ㉑～㉒ …… 解説文一覧 (4) ……	58
看板設置場所 ㉓～㉔ …… 解説文一覧 (5) ……	59
看板設置場所 ㉕～㉖ …… 解説文一覧 (6) ……	60
看板設置場所 ㉗～㉘ …… 解説文一覧 (7) ……	61
看板設置場所 ㉙～㉚ …… 解説文一覧 (8) ……	62

付録 未設置の史跡案内の解説文一覧 (9) も
63 ページに掲載していますので、参考にしてください。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（1）

①白鳥神社と白鳥古墳跡

日本武尊を主神として祀る白鳥神社は、4世紀後半に造られたとみられる古墳の上に建立されていた。明治43年に神社修築の際に発見されたもので、古墳の副葬品には「三角縁神獣鏡2面」「素環頭太刀一振」「碧玉勾玉」「埴輪」などがあった。前三者は、現在東広島市中央図書館入口に展示されている。古墳の被葬者は、大和朝廷と関わるこの地方の首長とみられる。白鳥神社については、広島県神社誌に「景行天皇43年、天下に号令して諸国に白鳥神社を建てさせた。その時安芸国に於いて建立された社である。」との記述がある。

②白鳥山系縦断道出入口

この道を入れれば白鳥山系の尾根を縦断して、東西条小学校の南側に達する。その途中には、この山系においては標高が最高位（525 m）の三角点を通過する。三角点の場所からは、南方に向かって広島大学の天文台を眺望することができる。道は途中3カ所若干急斜面があるが、注意深く歩けば初心者でも縦走は可能である。ただし一人だけのウォーキングは避けた方がよい。

③白鳥神社参道郷地区の登山口

山陽自動車道にかかる別所橋を南に渡ったところが郷地区からの登山口である。郷地区の参道には、昔から神社までの距離をあらわす「丁石」が配置されている。別所橋を渡る手前にある牛舎の近くには「白鳥社七丁」の丁石が建っている。この麓の入口から山頂の神社まで約760 mの登山道である。途中に、天狗が彫ってある通称「天狗岩」があるので、見逃さないように注意してほしい。

④白鳥神社参道宮領地区の登山口

山陽自動車道にかかる白鳥橋を南に渡ったところが宮領地区からの入口である。この登山口には、「白鳥社八丁」と刻まれた大きな自然石が横たわっている。この麓の入口から山頂の神社まで約870 mの登山道である。（1丁=109m）この入口を行くと、二手に分かれる箇所があるので、手すりが設置されてある右方向に登っていかなければならない。途中に、江戸時代に建立された鳥居があるので、見逃さないように注意してほしい。

⑤小寺池堤防改修記念碑（天保）

江戸時代天保2年（1831年）にこの記念碑が建立された。杵原村の庄屋今井丈助と郷・溝口の有志によるものである。その当時の小寺池の堤防決壊は、郷・溝口の水田に大きな被害をもたらすことから、人々の生活を守るために必要な巨額の出費を厭わなかった人々への感謝の表現でもあった。

⑥白鳥神社下馬石

田万里から白鳥神社に参詣する人たちは、ここまで来て馬を下りた。そしてここから約100 m先の標柱（注連柱）に向かい、そこから参道を登っていったのである。乗馬を許されていた人は限られていた。神聖な山の山を崇敬しながら、一步一步登っていったことであろう。西高屋から上がってくる参道入口の郷立石にも高さ六尺と四尺五寸の二つの巨石が立っている。これも下馬石の名残である。

⑦小寺池災害復旧拡築記念

昭和20年9月17日の枕崎台風は、広島県内にも甚大な被害を与えた。県内では、死者1229人、行方不明783人、堤防決壊1252カ所と記録されている。西高屋村でも多くの被害を出した。小寺池上流に山津波が発生し池を埋没させ濁流は堤防を越えた。天保二年に構築した本堤は微動だにできなかったが、更なる上にかさ上げの工事を行なった、と記されている。終戦直後の混乱期に重なるこの惨状は、想像を絶する事態であったことは確かである。

⑧白鳥神社標柱（注連柱）

小寺池に上る道の手前には、白鳥神社への参道を標す石柱が建っている。下馬石の所で馬を下りた人は、この東側からの登り口から参道を上ったのであろう。慶應二年（1866年）に、溝口村の里正（庄屋）古川という人が願主になり建立したものである。現在は、この登り口から白鳥神社への登山は困難である。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（2）

⑨採石場 —岩盤が露頭—

西高屋の地表面下5～6mくらいの所には花崗岩の岩盤があって、その浅さによって少しの雨でも水田はザブ田になってしまう。五十石地区には、その岩盤が地表に顔を出している所がある。ここの露頭している花崗岩を砕石し加工して、溝口川を渡った西側にある山田家まで運び、その石垣を造ったそうだ。（山田英三翁屋敷跡には亀甲石といわれる石垣が組まれている）

⑩室町時代の水牢跡

朝廷の大炊寮領の高屋保（荘園）に地頭として入って来た平賀氏は、高屋堀に居を構えた。平賀弘保の時代に、その弟木原保成は、木原谷に木原城を築く。木原城から南西にある五十石まで進出し、その当時地頭平賀氏の対抗勢力であった荘園領主側の白鳥神社勢力と目と鼻の先でにらみ合った。荘園領主側は、神社に土地を寄進することで、地頭の徴税に対抗していた節があり、五十石の水牢は地頭平賀氏の威力を誇示するものであったのかもしれない。

⑪山田家亀甲石の石垣

山田家の広大な屋敷の南側に、数十メートルにわたって石垣が造られている。六角形をした亀の甲羅の形に加工した石が組み合わせてある。見事なものだ。この地から東側にある五十石地区の花崗岩の露頭から砕石したものだという。山田英三翁は、明治9年（1876年）この地で生まれ、若くして北海道に渡り電気事業を起こした。帰郷後西高屋村長に選ばれ、村の発展の基盤を築いた人である。

⑫架橋記念碑

何故この地に架橋記念碑があるのか、不思議に思われる人もいるだろう。元々この碑は、入野川に架かる貞政橋の近くにあったものだ。明治時代の日露戦争時、原村に駐屯していた帝国陸軍は、宮領、郷を通して入野川まで行軍するが、川の北側からの射撃訓練を行うためには橋が無い。そこで架橋することになったそうだ。南北に長い郷村の人びとは、この橋のおかげで往来が楽になり、明治40年にこの記念碑を建立したのだった。その後いつの日かこの場所に移転されたものだ。

⑬羽休の松（白鳥伝説）

日本武尊は、九州熊襲征伐の後すぐに、東国に向かった。関東を平定して尾張まで戻ったところで、伊吹山の荒神を平らげに出掛けるが、そこで手痛い攻撃を受け、ついに伊勢国で亡くなる。その魂は白い鳥となって河内、讃岐と飛んで行き、安芸国のこの地の松の木で羽を休めたということだ。その時、郷村の白い犬が吠えたため、白鳥山（神山）に飛んで行った。すると今度は雉が鳴いたので恐れたという。その後郷村では白い犬は飼わず、神山には雉は棲まないという言い伝えがある。

⑭白鳥神社の鳥居（宝暦七）

山陽自動車道に架かる白鳥橋を北へまっすぐ下りと、郷と宮領との境をなす古い山道に入る。宮領から白鳥神社へ上る参道である。その途中にそれほど大きくない鳥居がひっそりと山の中に建っている。江戸時代の宝暦七年（1757年）、「高屋邑の氏子」が寄進したものだ。白鳥神社の鳥居は、この宮領から上る参道上に二基と郷から上る参道に昭和5年（1930年）に建てられたものが一基現存している。

⑮白鳥社丁石（十五丁）

白鳥神社までの距離を表す丁石でも、江戸時代に造られたものは自然石に文字が刻まれているものが多い。神社までの距離は、約1630mとある。この丁石は太平洋戦争中この北側の石打原という丘陵地を開発する際に移動されたもので、元々ここに在ったわけではない。江戸時代安政七年（1860年）に、杵原村の庄屋今井久太郎が願主となって建立した。杵原はもちろん稲木、中島などの石碑によく見かける名前だ。

⑯貞政橋

日露戦争（明治37・38年）時、八本松の原村に駐屯していた帝国陸軍は行軍演習でよくここまで来ていた。この入野川の北側から南東方向に向けて射撃訓練を行なうために、ここに橋を架けたそうである。平成24年、入野川の河川拡幅工事中にこの河床3m下から巨大な埋れ木が出土した。専門家の鑑定では、70万年前の既に炭化し、化石化作用を受けている巨木であると判明した。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（3）

⑰白鳥社丁石（廿六丁）（古土井橋のたもと）

白鳥神社までの距離を表示する丁石のうちで現在判明しているのは、この 26 丁（約 2830m）が最長である。また明治 43 年に白鳥古墳が発見された当時、倒壊した神社の再建と多くの山林を神社の資産とすることに尽力された方の一人が、古土井橋の南側の高台に住していた。これらのことから、この地を白鳥神社参詣道の出発点としてこの丁石が設置されたものと考えてよいであろう。

⑱南氏屋敷跡の石塁（中世）

南氏は、鎌倉時代末期に出羽国の平賀氏が高屋保（朝廷の大炊寮の荘園）に地頭（鎌倉幕府の荘園管理者）として入部してくる以前から、すでに大炊寮領の在地有力者としてこの高屋に住んでいた武士である。賀茂郡最高位の白鳥神社に土地を寄進することで荘園領主側の勢力を味方につけ、幕府側の徴税者である地頭方と対抗していた。その南氏の屋敷跡に残る石垣である。しかし、戦国時代になるころには平賀氏の家老待遇で家臣に組み入れられ優遇されるが、やがて安芸津に移封される。

⑲西品寺境内の石槽（行賢関係遺品）

鎌倉時代末期から南北朝時代前期（1322 年～ 1341 年）にかけて、僧行賢の石造物が西高屋には多く残っている。その中の一つで、高さ 0.7m、長さ 1.2m、幅 0.65m、底に水抜き用の穴があり石風呂のようでもある。上面の縁取りに「元亨二年」（1322 年）とあり、行賢の初期の遺品である。もと稲木の廃長楽寺に在ったものを運んで来たといわれる。広島県の重要文化財に指定されている。

⑳戦争中の引き込み線橋脚跡

太平洋戦争末期（昭和 19 年）、国は軍需会社を指定し工場疎開を指導する。広島日本製鋼所は、西高屋村の中島に指定を受け、工場資材搬入用の鉄道線路の引き込み線が西高屋駅南側に敷設され、入野川の橋脚も建設された。その跡である。工場は、石打原一帯（現高屋中学校・マツダ団地など）を開発し建設する計画であった。社員寮は中島東の水田（現県立広島中高）を埋めて建設したが、工場を稼働する前に終戦となった。引き込み線敷設費の一部は、宮領川の隧道建設にも使用された。

㉑昭和隧道出口

宮領地区の入野川から中島地区に直接抜けるトンネルを掘り、西高屋駅裏の入野川に接続した隧道である。この昭和隧道は昭和 23 年に竣工し、宮領側の入野川は土手の決壊の心配がなくなり田の水も早く引くようになったが、地下にトンネルを掘ったために中島側では、三つのため池が涸れ、6 軒の井戸水が出なくなったという。そのため川からポンプで水を田に入れたり、新しく井戸を掘ったりしなければならなくなった。昭和 26 年には隧道で落盤事故があったという。

㉒木原松桂翁頌徳碑

木原松桂翁は、安永五年（1776 年）に杵原西本に生まれるが、幼時に母親と生別し母を慕う気持ちは募るばかりであった。広島に出て医を業としながら、四国までも母を捜索するが見つからない。47 歳の時、夢に出てきた母の言葉の「よなご」を思いだし、伯耆国弓ヶ浜に尋ねる。遂に思いは通じそこで母の墓を発見する。その孝義篤行は藩の表彰するところとなる。吉田松陰はこのことに感激して松桂翁の書をもらい受け、松下村塾の壁に掲げ、常に自分の修養と塾生の訓育の拠所としたのである。

㉓有田温三翁銅像古跡之碑

有田温三翁は、慶応元年（1865 年）郷村に生まれる。早稲田大学を卒業し、県会議員、衆議院議員に選ばれる。県政、国政に参画するも、常に郷土の開発を念願し、他町村に先駆けて耕地整理や農業振興に寄与する。西高屋駅の設置や育英公共事業の促進にも大きく貢献した。村民有志が銅像と頌徳碑を建立した。現在銅像はなく、頌徳碑のみが建っている。

㉔山田英三翁の碑

山田英三翁は、明治九年（1876 年）溝口村に生まれる。若くして産業振興の志をたて、明治 39 年に北海道に渡って電気事業を起こす。以来会社経営の才能を発揮し、経営する会社は十数社に及んだ。帰郷後西高屋村長に選ばれ、産業組合の設立、道路の開通、小学校、巡査駐在所、農業倉庫、隔離病舎を建設し村の発展の基礎を創った。また諸事業に寄附をし、大戦に際しては飛行機 1 機を献納した。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（4）

㉕凱旋記念碑 一日清戦争・清国事変凱旋記念—

日清戦争は、1894年・1895年に朝鮮半島をめぐる日本と清国の戦争である。日本が勝利し、下関条約を結ぶ。清国事変は義和団の乱ともいい、清国内の排外運動を清国が認めたことで宣戦布告となった。英米露仏独墺伊日の列強八カ国が侵出し首都を制圧。日本は、朝鮮半島の立場をロシアに対して有利にする目的があった。これ以後中国は列強国の半植民地化を招くこととなる。

㉖運動場竣工記念碑

中島村（現中島西北地区）にあった西高屋村立尋常小学校（翌年高等科を併設により西高屋尋常高等小学校）の運動場は、鉄道線路に近くまた道路整備などで狭くなり、昭和7年に、南側の高台（中島寺ヶ岡）が畑地であった場所（現高屋西小学校）を村民の奉仕により運動場として整備した。面積三千三十余坪。ただし運動場の土は、畑土や赤土のため雨が降れば泥沼状態になった。工事監督は、村長山田英三、寄附者は有田温三とこの記念碑は伝えている。

㉗尋常高等小学校門柱扉

明治41年（1908年）、西高屋の八カ村にそれぞれあった小学校を統一し、中島村（現中島西北地区、鉄道線路の北側）に西高屋村立尋常小学校（翌年高等科を併設により西高屋尋常高等小学校となる）ができる。その時設置された門柱扉を、昭和12年現在地に小学校を移転した際、ここに移設したものである。

㉘中島1号遺跡の出土跡

携帯電話無線基地局建設に伴い発掘調査が行われ、弥生時代後期の墳墓群が見つかった。30㎡の調査面積内に、石棺3基、土器棺3基が出土した。副葬品や人骨はなかったが、石棺1基を除いてすべて子どもたちのお墓と考えられるようだ。おそらくこの近くには、大人の墳墓や住居跡があるはずだということである。ここの東側の山中には、奥の谷古墳とよばれる長さ約30m～40mの前方後円墳の存在が確認されている。

㉙昭和隧道入口

昭和19年、当時の柳田安巳村長のとき、戦争中の食糧難の中、米の増産事業として隧道建設の計画が持ち上がった。隧道建設の計画は、途中で何度も変更されたり、工事が中断した。昭和20年の枕崎台風により、入野川上流では山津波や土石流が発生し、河床が高くなり水害の危険性は増した。昭和23年ようやく工事が竣工し、川土手の決壊の危険性が無くなり、水も早く引くようになったのだ。幅は2mで総延長は200m余の隧道を流れている川を宮領川という。

㉚宮領大畠耕地整理記念碑

宮領・大畠の水田地帯は、地下水が浅く水はけが悪い土地であった。田はザブ田で、膝まで浸かり「牛殺しの田」と言われていた。草を取るにも機械は押されず、這って取る。稲刈りは、田舟を用意して畦まで運び、大八車の通る道まで担ぎ出す。人も牛も苦勞して農作業をしていた。明治44年、広島県知事により耕地整理の実施が決定し、大正2年までかかる大事業であった。農家の人々は交代で働きに出て、トロッコ、エンボウ、シャベルなどで手伝ったということだ。

㉛西条層の露頭

約50万年から70万年前に、花崗岩が風化して堆積してできた土の層（厚さ約40m）を西条層という。その下には硬い岩盤があり、西高屋では入野川の河床3m～5m前後地下から上に西条層が堆積している。白市盆地、西条盆地、黒瀬盆地によく見られる地層である。入野川の郷地区（貞政橋付近）で発見された埋れ木は、この西条層の最下部にあったことから、50万年から70万年前の巨木であろうと推測できるのだ。

㉜新宮神社

旧称は、熊野新宮神社（藝藩通志）といい、伊邪那美神・泉津事解之男神・速玉之男神を祭神としている。本殿は三間社流造り（間口十一尺三寸、奥行十尺五寸）、6坪の拜殿、98坪の境内地となっている。由緒は不詳だが、天文年間（1532年～1555年）に本殿を再建しており、海老虹梁・手鋏・組物の一部に室町時代当時の部材を残していて貴重である。中世建築のシンプルさがよい。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（5）

㉓力善観音堂

この観音堂は、もと廃力善寺跡に建てられたものである。その堂内の厨子には十一面観音、不動明王、毘沙門天が安置されている。また堂内には参詣者が布で編んだ綱を振り動かし手打ち鳴らす鱧口（むにぐち）があり、その銘には、享保十（1725年）東引御堂町（広島市中区胡町堀川町辺り）の人が奉納したと記してある。

㉔石燈籠（時成八幡神社再建記念碑）

この地の北方向に時成八幡神社がある。時成八幡神社は、永享十年（1438年）に木村兵庫時成という人が社殿を建てたのが始まりだ。その後何度か建替えがなされているが、この石燈籠は大正13年に再建されたときの記念として、宮領西の氏子が建立したものである。

㉕桧山の薬師堂と薬師丸古墓

この薬師堂は、藝藩通志には虚空蔵と書かれている。その横に安土桃山時代の天正十五年（1587年）銘の墓碑が立っていて、その月輪（がちりん、円い輪）の中に梵字（阿弥陀如来）を刻み、その下に女性の戒名「蓮溪瑞香禪定尼」を七字刻している。この板碑は、追善供養を目的とするものから、室町時代末期に至ると死者の埋葬標識（墓碑）としての意味を持つようになる、ちょうどその過渡期に相当する遺品だということで貴重である。

㉖檜山備前の墓

檜山村庄屋良助という人が、文政七年（1824年）に書いている所によれば、「先祖檜山備前出生は関東で芸州へ下って来て高屋檜山村に居住したのがはじめ」とある。徳満村とっていたのを檜山氏が入ってから檜山村に改めたという。備前に次いで、淡路・丹後・信濃とあり、大畠村の時成八幡は、木村兵庫時成が勧請したが、文明二年（1470年）、二代目の淡路が再建した棟札があるということだ。毛利元就・輝元が平賀老臣に宛てた書状に、檜山丹後守の名がみえる。

㉗天満神社

祭神は、菅原道真公。本殿は、一間社入母屋造、向拝付。付属社殿は、幣殿（3坪）と拝殿（9坪）。750坪の境内地がある。室町時代に、檜山備前守が創建したと伝えられる。現在の社殿は、明治13年に再建されたものである。もと徳満村とっていたのを檜山氏が入ってから檜山村に改めたといわれている。

㉘時成八幡神社

祭神は、帶中津日子命・息長帶比売命・品陀和気命・宇気母智神。永享三年（1431年）藤原清秀は私林に小祠を建てたところ、同十年（1438年）木村兵庫時成という人、藤原清秀と相談の上自分所有の山林を寄進し社殿を建て時成八幡宮と称した。大畠村の鎮守神として村人に崇敬された。文明二年（1470年）平賀氏の家人檜山淡路という者、暴風雨で転倒した社殿を再建。現在の社殿は、大正13年（1924年）に再建されたものである。

㉙木原源左衛門之墓

平賀氏15代平賀弘保の弟保成は、高屋東村木原谷に城を築き、木原美濃守保成と称した。保成の長子が、木原源左衛門信友である。故あって大畠村に住む。源左衛門の子孫右衛門元政は白市村に住み、大文字屋、沼田屋の祖となる。江戸時代には塩浜経営などの事業を拡大して財をなした。元政の孫安正は、白市村を分かれて三津村に移り三津白市屋新六の祖となる。（藝藩通志）

白市の旧木原家住宅（国指定重要文化財）は、豪商木原氏の繁栄を今に伝えるものである。

㉚清観古墓

五輪塔の一部分と一緒に中世の墓碑がある。清観古墓と呼ばれるこの墓碑には、「享禄五年（1532年）」の銘があり、円い輪（月輪）の中に梵字のバン（金剛界大日如来）が彫り出している。中央部に男性「浄祐」の法名とその下左右に女性の法名「妙珍・妙林」が彫られていて、供養塔であろう。



西高屋史跡見処案内看板—解説文一覧（6）

④①大皇の行賢遺跡

上方に梵字のカンマーン（不動明王）、下方にバン（金剛界大日如来）を彫っている。また「曆応三」と記し、その左側には「行賢」とある。不動明王と大日如来の二尊を彫っていることから、大日如来信仰を示しており、行賢の広範な宗教活動が知られる好史料である。（「中国地方の板碑」より）

④②古慈喜城跡

杵原西本の丘陵地が南へ張り出した突端で、山を掘り割って独立させた三角形の低い城跡である。15世紀に入って（1417年～1433年）、稲木・大皇は京都相国寺の領地になっていたことがあるが、その後は平賀氏の支配するところとなり、12代平賀頼宗は子弘宗にそれらを譲っている。また弘宗の弟宗仲は大皇氏を名乗っており、この時期大皇に入ったと考えられる。古慈喜城は、平賀氏が高屋の西部地域に進出し、高屋南部地域の白鳥神社勢力と対峙する城であったのかもしれない。

④③巨大神殿跡（西本6号遺跡）

飛鳥時代（7世紀末天武天皇の世）に造営された南北92m、東西80mの巨大な地を堀で囲んだ古代神殿跡だ。堀の内部からは、高床神殿（独立棟持柱付き掘立柱建物・伊勢神宮の本殿と同じ構造）、神事・祭儀の直会殿（四面庇付き建物）、着到殿など10棟以上の建物跡、金銅製の毛彫りの馬具、墨書土器、硯などが出土した。この巨大神殿は、伊勢神宮の外宮の規模に近似していて殿舎の位置などにも共通性があり、中央からの技術者の関与があったといわれている。

④④行賢遺跡（不動明王立像他）

ここは、長楽寺があったところといわれている。堂の中には、不動明王立像と多聞天立像が安置されている。不動明王立像は、全高82cm、像高51cm、舟形光背に火炎と像を陽刻している。背面に「元亨二年」（1322年）「願主行賢」の銘がある。多聞天立像は、全高83cm、像高51cm、光背は宝珠形で銘はない。行賢遺跡の中では、西品寺にある石槽と同じ製作年で最初期のものである。

④⑤解剖碑

明治21年（1888年）12月6日、賀茂郡中の医師が集められ、指物大工だった中町逸平氏の人体解剖が行われた。解剖は、稲木の西岡清三郎氏宅の庭前を白幕で囲いをした中で行なわれた。福富町久芳の黒川医師が執刀した。まだ人体の内臓を見た医師は少ない時代に、自らの命を医学の進歩に役立ててほしいという、中町氏の遺言通り実行された。碑文は、翌年賀茂郡医師会第3支部が建立した。もとは国道沿いにあったものをここに移設したものである。

④⑥西八幡神社

祭神は、品陀和気命・帶中津日子命・息長帶比売命・御井ノ神・天照大神・宇気保知神で、本殿は、三間社流造。幣殿、祝詞殿、拝殿と鳥居2基がある。天養元年（1144年）三好兵衛晟光という者、私林に祠を建てて崇敬していたところ、村人相談の上、社殿を建立して村中の鎮守神となった。明治40年稲木門前の杉平神社、稲木近信の東八幡神社、境内社の夢城神社、同栗本神社を当神社に合祀した。境内周辺には、アベマキやコナラなどの巨樹が見られる。

④⑦門前古墓（麿長福寺跡）

この毘沙門堂は、室町時代に長福寺のあったところといわれている。入野の報恩寺に伝わる古文書によると、稲木の長福寺には寺領があり、平賀弘章（10代）の弟時宗は、応永24年（1417年）高屋保半分のうち3分の1を、一時京都相国寺の塔頭慶仲周賀に譲ったとあり、周賀相伝の寺であった、と藝藩通志は書いている。五輪塔、宝篋印塔、石仏があるが、バラバラに組まれているものの、市内では最大級の五輪塔と宝篋印塔である。



西高屋史跡見処案内看板—解説文—一覧（7）

④8 行賢遺跡（地蔵菩薩立像や供養碑）

2基の供養碑と地蔵菩薩立像である。一つの供養碑には、法華經譬喩品^{ひよぼん}の1節を刻み、もう1基には、「右為入蓮、正中二」（1325年）「願主僧行賢」とある。地蔵菩薩立像は全高100cm、像高54cm、像は陽刻で背面に「曆応四」（1341年）の銘がある。行賢遺跡の中では、最晩年のものだ。この近くには、当寺西福寺があったといわれている。西福寺は、杉森山と号し天養元年（1144年）の創建で、高野山の僧信随が開基したという。

④9 杉森八幡神社

祭神は、品陀和気命・五男神・三女神・天之水分神。本殿は、三間社流造で、幣殿、拝殿を持つ。保延六年（1140年）今井吉房という者、私林に祠を建て宇佐八幡宮の御分霊を勧請したところ、天養元年（1144年）杉森の城主下総守が参拝して社殿を建立したという。明治41年、杵原の榎ヶ坪八幡神社、石挟八幡神社、正原八幡神社、山手雨請神社、山手荒蒔神社を合祀した。境内には、スギやヒノキの巨樹がある。石段の下の杵原川に架かる橋の欄干には擬宝珠があり、珍しい。

⑤0 梵字岩

横2.6m、高さ2.2mの大岩に、梵字が彫られている。円の中は、金剛界大日種子と胎藏界大日種子である。その下に、「藤原・光叶・朝臣」、「享祿三年」（1530年）とある。光叶は名井氏で、平賀氏の重臣である。白山城に続いて頭崎城築城の後、尼子氏と大内氏の狭間で苦しみぬいている時期である。名井光叶の兄光秀が、主家の現状を憂慮してこの地で自刃し果てたといわれている。（光叶本人という説もある）この梵字岩の奥には小さな観音堂がある。

⑤1 旧今井家屋敷跡と杵原川底の敷石

木曾義仲の臣今井四郎兼平を祖とするともいわれ、江戸時代には有力な庄屋としてその任にあたった。白鳥神社の鳥居や丁石、石打八幡神社や杉森八幡神社の標柱などにその一族の名を多く残している。屋敷の前を流れる杵原川の川底には、浸食や崩壊を防ぐための敷石が詰められている。またこの屋敷の上を通る国道沿いには今井家の墓地がある。

⑤2 壬生忠見歌碑

この歌碑は、平成25年8月に梅谷秀夫氏が発起人となって建立したものだ。藝藩通志が、賀茂郡の古蹟名勝の筆頭にあげている「安志乃山」を、平安時代の代表的な歌人壬生忠見が詠んだということの後世に伝えるためである。「あめのあし」は、雨足と足山を懸けていて、「指南」は「しるべ」と読む。

⑤3 楽市八幡神社と巨樹

祭神は、品陀和気命。本殿は、三間社流造、幣殿、拝殿と鳥居1基がある。寛政六年（1794年）村中の者相談の上、宇佐八幡宮の御分霊を勧請し、楽市彦右衛門が私林を寄進し、その地に社を建てた。本殿を嘉永二年（1849年）、拝殿を嘉永四年に建て替えた。境内には、アベマキの巨樹がある。樹高18.6m、胸高幹囲436cm、根回り774cmあり、樹皮に厚いコルク層が形成されている。以前は、ビンの栓やコルク板に使われるため県内で多く植林された。

⑤4 増原実翁之碑

増原実翁は、明治26年（1893年）に生まれる。警察界に入り、上下・庄原・三次・府中・尾道・呉の各警察署長を歴任し、昭和21年西高屋村村長、昭和30年小谷村との合併で高屋町となり初代高屋町町長、賀茂郡と豊田郡の郡境変更を実現、また昭和33年造賀村との合併を果たした。昭和36年、時の内閣総理大臣池田勇人氏の題を頂き、町民有志がこの頌徳碑を建立した。



西高屋史跡見処案内看板—解説文一覧（8）

55千人塚古墳（仙人塚古墳）

古墳時代初期・4世紀末から5世紀初頭に築造されている。石棺は非常に丁寧な構造で、この地域の最有力首長墓に相応しいものである。その構造は、大型古墳の三ツ城古墳へと継続されるものだとされている。三ツ城古墳の被葬者は、安芸国をまとめあげた人物が想定されているが、この千人塚古墳の被葬者は、それに先行し、しかも三ツ城古墳の被葬者と関連深い人物である可能性が指摘されている。安芸国の大きなまとまりが形成された時期である。

56柳田安巳先生之碑

柳田安巳先生は、昭和16年（1941年）3月から昭和21年（1946年）6月までの太平洋戦争開始から終戦後までの間、西高屋村村長として務めた。戦時中には、日本製鋼所の工場疎開を誘地し、西高屋駅南の鉄道引込み線敷設費の一部を昭和隧道建設に充てたり、社員寮建設、工場建設に伴う水田や山林の開発に着手した。これらの開発が、戦後の西高屋の発展の礎になるのである。この頌徳碑は、昭和26年5月西高屋村が建立した。

57杵原正原の薬師堂

藝藩通志によれば、常楽寺跡とあり薬師堂はその名残であろうか。この薬師堂の中に、大切に保存されてきた銅鏡がある。銅鏡形の銅板に蹴彫りで十一面観音が単独で描かれたもので、12世紀半ば、平安時代末期に制作されたものと推測されている。神仏習合の遺品として貴重であり、平成26年東広島市重要文化財の指定を受けた。（平安時代末期に大炊寮の荘園高屋保が成立したといわれる。大炊寮の長官大炊頭は貴族中原氏が務めていた。今井氏は、この高屋保の領主中原氏の出自であることから、この高屋保にはその当初から居住していたものと思われる。この薬師堂は、現在も今井氏の屋敷内にあり、毎年薬師様の法事が行われている。）

58巴神社

祭神は、品陀和気命・須佐之男命。本殿は、一間社切妻造で、釣殿と拝殿、鳥居2基を持つ。山田英三翁が私林を寄進して、近郷の三つの神社を合祀したので、巴と称するとも言われる。溝口後谷の今伊勢神社（豊宇氣比賣神）、溝口雛側の八反田神社（品陀和気命・須佐之男命）、溝口茶木原の黄幡神社（御産巢日神）である。この地域では最大の鳥居が立っているが、五十石の岩盤露頭から採石したものといわれる。

59溝口尋常小学校跡

明治6年溝口、郷、中島、杵原の4ヵ村が協同して、中島村西品寺を借りて由観舎という小学校を創設。明治7年杵原、中島を分離して溝口、郷だけで、溝口村の山田純一氏宅を借りて責善館という学舎を創る。明治18年暴風雨のため校舎が転覆したので、溝口村増岡治三郎氏宅を借りて校舎とする。翌年校名を雛小学校と改称。この後、制度の改変ごとに名称が変わり、明治20年溝口簡易小学校、明治24年溝口尋常小学校となり、明治41年西高屋尋常小学校ができるまで、溝口村雛の地で教育が行われた。ここから数十メートル西に入った所に学校があった。

60郷の阿弥陀堂跡（東田遺跡）

東田遺跡出土の遺物が示す中心的な時期は、11世紀後半から12世紀前半にかけてである。古代の高屋郷の有力豪族の本拠地であり、その豪族によって建てられた1間四面庇付の阿弥陀堂だったと考えられている。東田遺跡は、浄土信仰がこの地に入って来たことを窺わせる良好な資料となっている。12世紀後半には、高屋郷は朝廷の役所の一つ、大炊寮の費用を賄う便補の保（荘園）に指定され、大炊寮領高屋保が成立する直前に創建されたものだ。

61貴船神社

祭神は、猿田毘古神・高麗神。本殿は、一間社流造で、拝殿と神輿舎を持つ。享保八年（1723年）の棟札（貴布禰大明神）、嘉永元年（1848年）の棟札（奉建立新山金毘羅大権現本殿）が、平成23年の本殿修築の際に発見された。もとは中島中の町の入野川北岸にあったものを、昭和25年現在地に遷座した。止水祈水の神様でもある。氏子は、中島の住民である。



未設置の西高屋史跡見処案内看板の解説文（9）

●室町時代高屋保荘官屋敷跡 —溝口4号遺跡—（溝口・東広島呉道路インターチェンジ内）

東広島呉自動車道の工事に伴う発掘調査で、弥生時代中期の環濠集落と鎌倉時代の大きな溝に囲まれた集落、そして南北朝期から室町時代のかかり規模の大きい屋敷跡の存在が明らかになった。高屋は、高屋保といわれて朝廷の食料を管理する役所・大炊寮の領地（荘園）であった。その荘園領主の代官である雑掌（荘官）の屋敷跡ではなかったかと考えられている。屋敷の横には、2m くらいの道があり、竹原の田万里から上ってくる交通の要所として重要な場所であったと思われる。

●大福寺跡（溝口・大福寺）

文治三年（1186年）、大忍法師の開基する所といわれ、白鳥神社の社僧であった。白鳥神社の社領は、宮領と郷と溝口の三村で650石あり、そのうち200石を大福寺が領している、代々同社の別当職にあった。しかし天正十二年（1584年）に白市に移り、西福寺と号して今に至っているが、何故かその後、この溝口の地に再び大福寺と称した寺が存在していたそうである。

●石打八幡神社（中島・高屋中学校西側の石打園団地に近接）

祭神は、品陀和気命・帶中津日子命・息長帯比売命。鎌倉時代後期の元寇（弘安の役1281年）の際に、朝廷・幕府は、全国の寺社に異国襲来の調伏を命じた。元兵が神風によって敗退したことを賀して、村民は一社を建立し、石清水八幡宮の八幡大神を勧請したと伝えられる。氏子は、中島、宮領、郷、溝口、重兼、貞重だが、なぜこの六地域になったのかは不明である。郷村の割庄屋の有田健左衛門、杵原村の庄屋今井久太郎などの名前が境内の標柱に刻まれている。神社周辺は石打原と呼ばれていて（藝藩通志）、明治10年（1877年）の西南戦争の頃までは、軍隊の軍事演習が行われていたそうである。（原村史）

●廃大徳寺跡（大島・時成八幡神社近く南東の山中）

藝藩通志には、時成八幡神社の東に廃寺あり、萬圓山大徳寺跡という、と記されている。鎌倉時代末期に、出羽国の平賀氏が朝廷の大炊寮の荘園であった高屋保に地頭として高屋堀に入って来る以前から、大徳寺は高屋保の在地有力武士であった南氏の菩提寺であったといわれている。従って、時成八幡神社が建立される前には、大徳寺は既に存在していたものと考えられる。周辺の竹藪の中には、石仏や五輪塔などが埋まっており、寺の境内であったことをうかがわせる。

●西高屋尋常高等小学校跡（中島・西北地区の現サムエル幼稚園南側）

明治19年（1886年）小学校令が公布され、小学校が尋常小学校と高等小学校の二段階となった。西高屋では、明治24年（1891年）溝口簡易小学校を溝口尋常小学校に、桧山簡易小学校を大島尋常小学校に改める。明治41年（1908年）各地域にあった小学校を西高屋村立西高屋尋常小学校とし、中島西北に新校舎を建築移転する。翌年高等科を併設して西高屋尋常高等小学校ができた。校舎は現在の小学校北側鉄道線路の横にあり、今もその面影を残す倉庫がある。

●坂田亮三翁頌徳碑（宮領・宮領西地区）

坂田對三郎の長子として生まれ、師範学校を卒業した後、溝口小学校・戸野小学校・賀茂高等小学校・西条尋常小学校で教鞭をとり、明治35年（1902年）に退職するまで2000余名の児童を教育する。大正6年（1917年）西高屋村村長に選ばれ、教育の刷新と地方文化の向上に尽力した。大正9年に村民有志、門弟により頌徳碑を建立する。

●行賢銘の板碑・石仏・石槽（稲木・西山と栗本、大島・清観、中島・西南地区西品寺境内）

行賢と銘が彫られている板碑（供養碑）である。密教で仏・菩薩を標示する梵字を種子といって、西福寺跡大日種子板碑「正中二」（1325年）、西山大日種子板碑「曆応三」（1340年）、大島二尊種子板碑「曆応三」（1340年）、西山大日種子板碑「曆応四」（1341年）の計4つが見ついている。板碑以外にも、稲木栗本長楽寺跡の不動明王立像石仏、中島の西品寺境内にある石槽には、行賢の銘が刻してある。行賢と銘が彫られていない板碑が稲木西山には少なくとも7カ所で見ついている。



資料 — 西高屋をもっと知るために —

西高屋に現存する資料は、いたるところに存在しています。神社の標柱や玉垣に、頌徳碑や記念碑などの石碑に、スナップ写真や記念写真の中に、古文書、記録文書や古い地図に、山や川、道路や橋、田んぼ、畑の形状の変化の中に、もちろん住居跡や墓地、古墳などいろんなところに、過去から現在まで人が住んできた足跡を発見することができます。それらを見つけては記録してきました。しかし、記録するとき見間違いや読み間違いをすることもたびたびでしたが、それでもたくさんの資料が山積みされています。

この度の改訂版第4版を発行するにあたって、その中の一部をここに掲載しようと思立ちました。視写したり記録するとき、少なからずの誤りがあるとは思いますが、ご容赦の程お願いいたします。

資料掲載の目次

①小寺池周辺の災害碑	65
②木原松桂翁の碑	66
③有田温三翁の碑	67
④山田英三翁の碑	68
⑤高屋西小学校運動場竣工記念碑	69
⑥白鳥神社周辺の地名と巨大神殿跡について—禊と祓の世界—	70
⑦高屋各村の面積・米の収穫高・戸数・住民数など（藝藩通志）	72
⑧西高屋に残る不思議な口碑伝説（大正2年）	73
⑨大畠と溝口にあった尋常小学校の記録	74
⑩「日本製鋼所 西高屋に疎開」について—戦中・戦後の足跡—	75
⑪昭和隧道の話—官領の古老の苦労話—	76
⑫県立広島中学校高等学校敷地の移り変わり—地域住民の証言から—	78
⑬大久保ダムと用水路について—西日本豪災害直後の記録—	80



①小寺池周辺の災害碑（史跡看板⑤）

過去の災害を記録した石碑を災害碑といいます。この小寺池周辺の二つに碑は、東広島市内の災害碑の中で最も古いものだそうです。この記録によれば、江戸時代の天保年間の堤防決壊、昭和二十年九月の枕崎台風による「山津波」の発生、そして平成三十年七月の西日本豪雨災害時の土石流の発生と、過去三度の大災害がこの小寺池を襲ったことがわかります。こうしたことは今後も起こりうるということを将来の人たちに警告を発しているのが、この災害碑なのです。

就洪水小寺池堤切損再築調
御銀出之外 寄附

一 壹貫目 杵原村 今井文助

(溝口の土地の約半分を所有していた)

一 貳百目 當村角屋 喜代兵衛

(角屋、富原一氏実家)

一 貳百目 同東 彌助

(木原家・本家)

一 貳百目 同富屋 玉蔵

(分家・富原一氏祖父)

一 貳百目 同平 清十郎

(平賀の血脈・寺内家)

天保二 卯 十二月

※ ○天保二年は、西暦一八三二年

○()内は、井上が記しました。

昭和二十五年五月竣工
総工費
金貳百拾七万八千參百五拾貳円
昭和二十年九月拾七日豪雨ニ
災 害 因り上流山津波ヲ起コシ従前ノ
復 約七反歩全池ヲ埋没シ濁流池
寺 堤上ヲ奔走セルモ天保二年構
池 築二係ル堅固ナル本堤ハ微動
念 記 築 莫ナシ依テ旧堤ニ七尺ノ嵩上
工事ヲ施シ水面約壹町參反歩
ニ 掘築岩盤約百尺ヲ貫通シ底
樋ヲ築造セルモノ也

(右本文の下)

寄付者	委員
用地ニ反歩	山下 覺
山下 覺	渡部 正
用地九畝貳拾壹歩	小松武市
富原 慶一	今田 一篤
用地壹畝拾歩	三川 協?
山田 篤太郎	山下 慎一
事業担任者	山下 邑一
委員長 上田 勝	田中 忠好
副委員長貞原 寅市	山下 徳二
経○委員徳永定雄	保元 敏丸?

※昭和二十年九月十七日は、枕崎台風が来襲した日付です。「山津波」とは斜面崩壊をおこす土石流のことです。



②木原松桂翁の碑（史跡看板②）

木原松桂翁は、安永五年安芸国杵原村に生まれ、幼児に母親と生別し追慕の念あまりに深く、搜索すること四十年遂にその墳墓を伯耆国弓が浜に発見する。また祖父の墳墓を尋ねて四国を遍歴すること数回にわたり、遂に宿志を達し至孝の誠を致した。後広島で医を業として、特に貧者には篤く施療した。その孝義篤行は藩の表彰するところとなった。

吉田松陰は翁の事績を伝聞して深く感激し、書を請い、座右の銘として常に壁間に掲げて自己の修養と塾生の訓育に当たった。明治維新の元勲の多くは松下村塾より出たが、木原松桂翁の至孝の感化を受けなかったものはなかった。

木原松桂翁之碑 昭和八年七月

木原松桂翁ハ安永五年杵原村ニ生ル幼時母君ニ生別シ追慕ノ情禁スル能ハス捜査四十年至誠天ニ通シ遂ニソノ墳墓ヲ伯耆國弓ヶ濱ニ発見シタル又祖父君ノ墳墓ヲ尋ネテ四國ヲ遍歴スルコト数回遂ニ宿志ヲ達シ至孝ノ誠ヲ致セリ翁醫ヲ業トシ身ヲ持スル檢素常ニ貧者ニ施療スソノ孝義篤行藩ノ表彰スルトコロトナル吉田松陰先生翁ノ事蹟ヲ伝聞シテ深く感激シ翁ノ書ヲ請ヒ之ヲ壁間ニ掲ケテ自己ノ修養ト諸生ノ訓育トニ資セリ維新ノ元勲多ク松下村塾ニ出ツルモ翁ノ至孝ノ感化蓋シ亦尠シトセス茲ニ村民相謀リ翁ノ頌徳碑ヲ建設スル所以ノモノ亦翁ノ遺徳ヲ仰キ自省奮起ニ資セントスルニアリ

陸軍中将 田部正壯題字

文学博士 新見吉治撰文

大内秀山謹書

発起者 西高屋村長 山田英三

全小学校校長 柏尾輝喜

※ 安永五年は、西暦 1776 年です。

※ この「木原松桂翁の碑」は、高屋西小学校の正門を出た所に設置してある。



③有田温三翁の碑（史跡看板②③）

有田温三翁銅像古跡之碑

昭和二十八年十一月 西高屋村建立

勲四等有田温三君ハ慶應元年八月十三日本村大字郷ニ生ル資性温厚志操堅實幼ヨリ鋭敏酷ク學ヲ好ム長シテ早稲田大學ニ入り政治經濟ノ學ヲ修メ専ラ経国際民ヲ以テ自ラ任ス業了ルヤ〇〇界ニ入り又屢々ゑ縣市會議員及衆議院議員ニ當選シ治政ノ業奉仕スルモノ極メテ多シ常ニ郷土ノ開發ヲ念トシ他町村ニ率先以テ耕地整理ヲ行ヒ更ニ西高屋驛設置其他育英公共ノ事業ニ寄與貢獻セラルコト亦勸カラス村民深ク之ヲ徳トシ追慕止マスソノ懿徳ヲ永遠ニ傳ヘントシテ一同あ胥謀リ茲ニ記念碑ヲ建設スルモノ也

昭和七年四月 広島縣賀茂郡西高屋村建立

男爵若槻禮次郎題字 広島文理科大学長吉田賢龍撰 小川早苗書

※ この「有田温三翁の碑」は、高屋西小学校の正門を出た右側の坂道沿いに設置してある。



④山田英三翁の碑（史跡看板④）

頌徳 山田英三翁の碑

山田英三翁父君壽平母堂キヌソノ次子ナリ明治九年六月十四日西高屋村溝口ニ生ル翁若クシテ産業振興ノ志ヲ立テ明治三十九年北海道ニ渡リ電気事業ヲ起ス爾来三十八年間ソノ経営セル十数年ノ多キニ上レリ以テソノ識見力量ノ凡ナラザルヲ知ルベシ大正十五年五月衆望ヲ負ウテ西高屋村長ニ選バレ更ニ連選三回在職十四年八カ月ノ久シキニ亘ル公正ノ人ニ非ズンバ何ゾ斯ノ如キヲ得ン翁ノ村政ニ當ルヤ最モ力ヲ民生ノ向上ニ注ギ産業組合ノ設立道路ノ開通小学校巡査駐在所農業倉庫隔離病舎ノ建設等着々ソノ實ヲ舉ゲ以テ村勢興隆ノ基礎ヲ作ル而シテ翁甚ダ義氣ニ富ミ此等諸事業ノ經費ハ喜ンデソノ大部分ヲ寄附シヌ大戦ノ際ニハ進ンデ飛行機一台ヲ海軍ニ獻セリ是ヲ以テ衆人翁ノ美譽ニ感ゼザルハ無シ宣ナル哉昭和四年紺綬褒章ヲ授ケラレタルヤ翁今ヤ齡七十六悠々自適シテ老ヲ別府市ニ養フ令嗣節男君参議院議員タリ盛名ナリ蓋シ庭訓ノ致ス所カ茲ニ村民相図リテ碑ヲ建テ以テ翁ノ功德ヲ頌シテ亦之ヲ後世ニ示サントス

昭和二十八年二月二十日 文学博士斯波六郎撰

雲陽霞晴謹書

※ この「頌徳山田英三翁の碑」は、高屋西小学校の正門を出てすぐ右側に設置してある。



⑤高屋西小学校運動場竣工記念碑（史跡看板②⑥）

村^{（東）} 昭 和 七 年 〇 壽
民 勞 働 場 竣 工 記 念 碑
力 奉 仕 面 積 三 千 三 拾 余 坪 寄 附 有 田 温 三
工^{（西）} 事 監 督 村 長
山 田 英 三
助 役 日 山 次 太 郎
村 会 議 員 富 原 慶 一
上 綿 川 強 三 郎
他 七 名

※ この「高屋西小学校運動場竣工記念碑」は、高屋西小学校の正門を出てすぐ右側に設置してある。



⑥白鳥神社周辺の地名と巨大神殿跡について ー禊と祓の世界ー

1. 白鳥神社周辺の地名

明治三十五年三月、社司三善八雲が記した「廣島縣賀茂郡西高屋村字郷明神山 郷社白鳥神社御由緒調査書」の中に次のような記述がみえる。

一本松 郷中中道端ニアリ即羽休メノ松ナリ 當時ハ植継松ナレド周圍四尺アリ

一立鳥居 郷村ト宮領村トノ境又ノヘト申所ニアリ 社ヨリ五丁

一立鳥居 郷村鳥居原ニアリ社ヨリ十八丁

小寺山神宮寺 溝口村御建小寺山ニアリタリ

鐘樓跡 溝口村野山ノ内ニアリ神宮寺ヨリ五丁

大谷山十楽寺 郷村ニアリ當時ハ一丁西道風呂ト申所ニ觀音堂有之是其本尊ト申傳フ

立石山善佛寺 溝口村ノ内有アリ社ヨリ十二丁

大福寺山大福寺 溝口村ニアリタリ

巫(女)屋敷 垢離取川^{こりとり} 溝口村ニアリ(地元では「こりとき」と呼んでいる)

立石ニツ 溝口村地名立石ト云フ所ニアリ 一所ニ石ニツアリ 一ツノ高六尺幅五尺 一ツノ高四尺五寸幅二尺五寸ノ石ナリ 是往古ノ下馬所ト云エリ

立石一ツ 垢離取川ノ近所ニアリ石ノ高七尺幅三尺 此所モ昔ノ下馬所と云フ

神子免^{みこめん} 土器屋^{しめ} 注連ガイチ 溝口村ニアリ

神馬屋敷跡^{じんめ} 馬洗川 郷村アリ

往古神領アリ 宮領村一圓當村ノ高五百石余 溝口村ノ内時綱五十石
郷村ノ内別所百石 都合六百五十石余アリ

この中で注目するところは、「垢離取」という川があることと、下馬所の立石があるということ。これから先神様の所に向かうのに身なりを整える場所ということで、単純に馬を降りるところではない。「垢離を搔く」とか「垢離をとる」といい、大きい寺社の周辺で川に入って体の垢を流す習わし。これを「禊(みそぎ)」といい「穢れ」を浄めること。穢れは「気(け)が枯れ」で、水が枯れ、魂が腐ると考えられていた。



2. 巨大神殿跡（西本6号遺跡）から出土した墨書土器

1997年11月、東広島市教育委員会・財団法人東広島市教育文化振興事業団主催の「第4回安芸のまほろばフォーラム 発掘された古代「神殿」を検討する—西本6号遺跡をめぐる—」の中に、「西本6号遺跡発掘調査」という東広島市教育委員会の中山学氏の報告があります。その一部を抜粋します。

「まとめ 遺物は溝状遺構や掘立柱建物跡あるいは谷部などから多数出土しており、須恵器では7世紀後半から9世紀前半までの長期間に及んでいる。しかし大半は溝状遺構中～下層から一括して出土した飛鳥Ⅳ～Ⅴ期古相の須恵器で占められており、これらは実年代でいうと7世紀第4四半期（西暦670前後～700年前後）に位置づけられる。

さて、遺物の出土状況や組成を観察すると、以下のような本遺跡独自の特徴が明らかになってくる。

- ①土器は須恵器の杯や蓋杯または高杯などの供膳具が大半を占める。
- ②土器は日常使用する土師器製の調理具がほとんど見られない。
- ③土器はほぼ一カ所にまとめて投棄されている。
- ④円面硯や**墨書土器**が出土するなど、識字層の存在を想定できる。

（注）「解□」銘墨書土器や「U」字型鉄製品あるいは馬具といった特異な出土物、祭祀的要素を持つ丹塗りの土師器碗の存在は非日常的な空間であるこの建物群全体の性格の一端を示しているものと思われる。墨書の一部は、「解除（はらえ）」と読める。

（注）「日本書紀」「続日本紀」では天武5年から文武2年までの約二十二年間に五回、諸国の**大祓**が行われています。「祓」に用いる物として国造、郡司が出すものの中心に、馬、太刀、鹿の皮、鍬、刀子、鎌、稻がある。西本六号遺跡からこれらと同じものが出土している。」

「祓の根源的、一番プリミティブなものは、自分の身に邪気、汚れたものがあると、例えば爪とか唾を川へ捨てる、流す、そういう形で汚れを祓うことです。それ以後奈良時代以降も各地で人形などを流す、というかたちで残っています。ところが、この天武五年の大祓は、国造が主体となって行っており、そこに用意されているものは馬・太刀・鹿皮・鍬・刀子・鎌です。こういうことから見ると、ここで行われている大祓の目的は、個人を祓うということも十分あるわけですが、むしろ国造が支配していた国や、令制の国にある邪気を払うという、このような新しい秩序を意図して作ったのではないかと思います。」

（「発掘された古代「神殿」を検討する」—西本六号遺跡をめぐる—一九九八年 p39）

「遺跡の中心にある独立棟持柱をもつ掘立柱建物。これは神殿と考えられる高床の建物ですが、この建物の東は谷側に2メートル近い段差を設けており、下から仰ぎ見るような構造になっているのも、この建物の性格を考えるうえで重要な点です。・・・いわゆる棟持柱を持つ神殿が伊勢神宮の本殿につながっていく系譜が建築史学で指摘されています・・・」

（前記p43）

○祓は罪を取り除くもので、水ではなく「幣（ぬさ）」や「大麻（おおぬさ）」、人形などを使って祓うこと。「大祓」は宮中の神事として六月と十二月の晦日におこなわれ、大宝律令に正式に定められるが、十二月の大祓は廃れ、六月の祓えが水無月祓え、夏越（なごし）祓えとして残り、今も各地の神社では体の穢れを取り払う茅の輪くぐりなどが行われている。

⑦高屋の各村の面積・米の収穫高・戸数・住民数など（江戸時代後半）

◎藝藩通志（江戸時代、藩の命により頼杏平らが中心となって編纂したもの。1825年完成）

賀茂郡村名	田畝面積	米の取れ高	戸数	住人数	牛馬数
高屋東村 (1戸当たり)	133町2段余 (7,70反/戸)	1010石4斗余 (5,84石/戸)	173戸	875人	牛120隻 馬15匹
白市村 (1戸当たり)	36町4段余 (3,05反/戸)	271石7斗 (2,28石/戸)	119戸	712人	牛26隻 馬2匹
貞重村 (1戸当たり)	42町余 (4反/戸)	235石4斗余 (2,24石/戸)	105戸	446人	牛49隻 馬5匹
高屋堀村 (1戸当たり)	96町1段余 (6,1反/戸)	739石余 (4,68石/戸)	158戸	671人	牛71隻 馬20匹
郷村 (1戸当たり)	33町4段余 (5,48反/戸)	238石4斗余 (3,91石/戸)	61戸	295人	牛34隻 馬3匹
重兼村 (1戸当たり)	22町4段余 (5,21反/戸)	123石余 (2,86石/戸)	43戸	190人	牛20隻 馬2匹
溝口村 (1戸当たり)	44町2段余 (6,60反/戸)	293石9斗余 (4,39石/戸)	67戸	329人	牛43隻 馬3匹
中島村 (1戸当たり)	39町7段余 (5,36反/戸)	288石7斗余 (3,90石/戸)	74戸	345人	牛31隻 馬4匹
杵原村 (1戸当たり)	114町4段余 (7,11反/戸)	815石4斗余 (5,06石/戸)	161戸	611人	牛82隻 馬8匹
大島村 (1戸当たり)	34町5段余 (7,84反/戸)	319石4斗余 (7,26石/戸)	44戸	211人	牛21隻
宮領村 (1戸当たり)	48町4段余 (7,11反/戸)	503石1斗余 (7,40石/戸)	68戸	303人	牛39隻 馬1匹
檜山村 (1戸当たり)	33町9段余 (6,16反/戸)	229石2斗余 (4,17石/戸)	55戸	271人	牛35隻 馬3匹
稲木村 (1戸当たり)	53町6段余 (4,62反/戸)	412石余 (3,55石/戸)	116戸	462人	牛58隻 馬3匹
高屋保合計 (1戸当たり)	732町2段余 (5,89反/戸)	5479石6斗余 (4,40石/戸)	1244戸	5721人	牛629隻 馬69匹
造賀村 (1戸当たり)	225町3段余 (4,20反/戸)	2130石1斗余 (3,97石/戸)	536戸	2131人	牛208隻 馬40匹

注) ○小谷村は豊田郡のため、未記入。

参考) ○土地の面積 1町=10段(反) 1反=10畝=300坪=991,7㎡ (1a=100㎡=30,25坪)
○米の取れ高 1石=10斗=150kg 1俵=4斗=60kg 1斗=10升=15kg



⑧西高屋に残る不思議な口碑伝説（「郷土誌」香川都一著大正二年）

注) 以下の記述は、大正5年に刊行される「賀茂郡史」の編集者による依頼にもとづき、香川都一氏が西高屋で調査した資料の一部であると思われる。この原本は、現在高屋西小学校に保管されている。

1、稲木城趾

字稲木鷹巢山ハ舊伯耆守杉森晋作ノ城跡ナリト云フ 屋敷ノ跡ト覺シキモノ明瞭ニ記録モアリト傳フレドモ探リエズ。

注) 舊=旧

2、村社杉森神社

當社ハ稲木城主杉森氏ノ勸請セシモノナリト傳フ 城主ノ傳説ト誦合スレバ事實明瞭ナルガ如キモ記録ハ存セズ。

3、恨石（うらみ石）

字中島北鳴子ニ石アリ 「昔字大畠山寄ト云フ所ノ豪族女人ヲ殺害シタリシガ其屍化シテ石トナリ 傷ツクレバ則チ血出ヅ」ト傳フ。

4、山寄ノ豪族（やまよせの豪族）

字大畠山寄ト云フ所ニ舊屋敷アリト傳フ 此處ニ鷹巢山稲木ノ城主幕下ナル豪族居リタリト。

5、大蛇ノ痕

字杵原二百石谷ノ邊ヨリ字中島ノ南北ニカケタル一帯ノ地及郷ニ至ルマデニ蜿蜒タル一種ノ地帯アリ 稲ヲ植エ付クレバ必ズ赤クナリテ他ノ地ノ物ヨリ發育良好ナラズト傳フ 杉森神社ヨリ大蛇出テ、此ノ地ヲ通りテ南ニ去レリト 蓋シ大蛇ハ稲木ノ城主ヲ警ヘ南ニ走レルハ城主ノ敗走ヲ諭シタルモノニテ大蛇ノ痕ノ不作ハ城主ノ暴戾ヲ説キタルモノナル可シ 城主ノ幕下山寄ノ豪族女人ヲ殺害シタルコトト照合スレバ或ハ事實ニ幾キ感アリ。

注) 暴戾：荒々しく道理にもとること 例「暴戾な帝王」「暴戾の限りを尽くす」

6、今井兼平ノ末孫

字杵原ニ今井姓アリコハコレ源義仲ノ臣今井四郎兼平ノ末孫ニシテ系圖モ明ニ且ツ粟津ガ原ナル兼平ノ墳墓ニモ「一族皆安藝杵原ニ落ツ」ト記シアル由 嘗テ兼平ノ六百年祭ニハ今井家ニ對シ案内アリテ参拝セラレタル例モアリ 蓋シ事實に幾キモノナルベシ

注) 今井兼平は貴族中原氏の出自であり、大炊頭の中原氏を領家とする大炊寮領高屋保の杵原に落ちてきた理由はその辺りにあるのかもしれない。

7、吉行ノ城主（白市城主ノ幕下走リテ吉行ニ城ヲ築ク）

吉行ノ城主ノ嫡流ハ吉行ノ木原氏ニシテ字檜山及大畠ノ木原氏ハ其一族ナリト云フ 又三津町ニ大文字屋トイフ家アリシガ其家ヨリ白市屋トイフ家出デタリ 大文字屋ハ舊吉行木原（三野屋）家ヨリ出デタルモノナルヨリ其末ヲ白市屋ト称スルモ故アルナリ。

8、五輪塔

字檜山薬師丸（今ノ姓ハ津川）ノ境内ニ五輪塔アリ 俗ニ檜山五輪塔ト云フ 傳フ「コハ舊國造様ノ境内ニ在リタリ」ト。

注) 國造（こくぞう、くにのみやつこ）

9、婆ノ足（ばばのあし）

字宮領ニ巨人アリテ其足跡ヲ遺セリトテ岩面ニ長サ一尺餘幅五寸餘ノ足形ノ凹ミアル石アリ 今ハ石橋材トナリテ足跡ハ其裏面ニアリ



⑨大畠と溝口にあった小学校の記録

■小学校沿革誌 一明治廿六年八月改一 抜粋（校名と位置の変遷のみ）※高屋西小学校提供

大畠尋常小学校（下線は井上が記す）

- 1、明治七年二月四日 元稲木桧山大畠宮領四ヵ村協同シテ桧山村巢内四郎兵衛宅ヲ借受ケ弘道館ト称スルモノヲ設立セシヲ以テ創トシ其後桧山小学校ト改称シ下等小學校ヲ置ク
- 2、明治十三年四月 全村藤原誠七宅ヲ借受ケ之ニ移轉ス校名學科元ノ如シ
- 3、明治十四年七月 全村木原保次郎宅ヲ借受ケ之ニ移轉ス校名學科元ノ如シ
- 4、明治十七年二月 全村柳河教一宅ヲ借受ケ之ニ移轉ス校名學科元ノ如シ
- 5、明治十九年三月 大畠村日山傳助所有居宅ヲ買受ケ之ニ移轉ス 校名學科元ノ如シ 以上ノ誌上ニ於テ本校位置ノ変更屢ナルヲ見ル是レ全ク其校舍ノ借受ナルヨリ或ハ校舍ノ狹隘ニ因シ或ハ通路ノ便〇ニ由来シ其他持主ノ事情等ヨリシテ已ムヲ得ザリシナリサリトモ校舍新築ハ民力ニ堪ヘ難カリシナリ
- 6、明治十九年四月ヨリ迫田小學教場ト改名シ～
- 7、明治廿年三月本郡告示第一六号ニ拠リ本校名ヲ檜山簡易小學ト改名シ～
- 8、明治廿年十月本郡訓令甲第八十三号ニ拠リ檜山簡易小學校ト改名ス
- 9、明治二十四年四月一日ヨリ新小學校令中第四章小學校ノ設置施行セラレ従来檜山簡易小學校ト称シ郡内〇〇村費ヲ以テ維持セシヲ大畠尋常小學ト改名シ西高屋村費ヲ以テ維持スル〇トナレリ

■小学校沿革誌 一明治二十七年十月一 抜粋（校名と位置の変遷のみ）※高屋西小学校提供

溝口尋常小学校（〔 〕内は、明治三十三年沿革誌の記述）（下線は井上が記す）

- 1、明治七年三月 溝口郷重兼中島ノ四ヵ村及宮領ノ東半部東村ノ一部協同シテ溝口村山田順一〔純一〕所有牛馬屋ノ二階ヲ借受ケ始メテ學舎ヲ創設シ責善館ト名ク是本校ノ起源ナリ
- 2、明治七年十二月ニ至リ學舎ヲ改築シ
（山田順一〔純一〕宅地内ニ築ク其構造粗〇外觀恰モ牛馬屋ノ如ク東西ニ短ク南北ニ長ク而シテ東方ニ面セリ）
- 3、明治十年〔明治九年十月十七日〕 責善館ヲ改メテ溝口小學校ト称シ科程ヲ定メ學科ヲ増設ス
- 4、明治十八年九月十日 暴風雨アリ校舍傾覆復タ用フ可カラザルニ至ル 即チ溝口村増岡治三郎居宅ノ一部ヲ借受ケ僅ニ廢校ノ非運ヲ免レ綏命ヲ繋グヲ得タリキ 此ニオテ當時ノ戸長福原保定副戸長古川俊夫及有志者相謀リ校舍新築ノ義舉ヲ企テ奔走盡力至ラザルナシ 而シテ其功空シカラズ寄附金應募額非常ニ多ク既ニ建築ニ着手シ將ニ上棟式ヲ行ハントスルニ際シ或ル事情ノ激スル所トナルノ極終ニ九仞ノ切ヲ一簣ニ欠キ柱楹棟梁ノ用ニ供ス可キ無数ノ大木巨材ヲシテ徒ラニ雨露ノ侵蝕ニ委シ有志者幾多ノ經營辛苦ヲシテ空シク画餅ニ歸セシムルヲ致ス 豈慨嘆ノ至リニ堪エンヤ
- 5、明治十九年四月 雛小學教場ト改称シ學制大ニ革リ高尚ノ學（學）ハ之ヲ専門家ノ業トシテ寧ロ之ヲ避ケ専ラ學（學）用ニ適切ナル普通一般ノ智能ヲ練磨スルノ方針ヲ取ルニ至レリ
- 6、明治二十年四月 溝口簡易科小学ト改メ初等科ヲ廢シ小學簡易科ヲ置ク
- 7、明治二十年十月 更ニ溝口簡易小學校ト改名ス
- 8、明治二十一年十一月廿六日 本校新築落成ノ盛儀ヲ挙グ



⑩ 「日本製鋼所 西高屋に疎開」 について―戦中・戦後の足跡―

記録：井上

- 1941 (s'16) 年 12 / 8 太平洋戦争開始
- 1944 (s'19) 年 1 / 18 日本製鋼所軍需会社第一次指定 (140 社のうち)
➡土地の強制収容可能➡工場疎開開始
- 1944 (s'19) 年 5 / 19 日本製鋼所は、西高屋駅南方丘陵地 (現高屋中学校からエコノイエにかけて) を買収し、開拓を始める。
 - ①日本製鋼所疎開用地として約 75ha を整備する。
 - ②西高屋駅南側周辺の土地 20 余 ha を整地し、物資輸送用地として整地する。
 - ③その内、物資輸送のための鉄道引き込み線敷設用地を駅西側に作る。
 - ④日本製鋼所の社員寮の建設を西高屋駅北東部に総面積 72,225㎡の水田を強制収容する。
- 1944 (s'19) 年 6 / 30 内閣は、学童疎開を閣議決定
- 1945 (s'20) 年 3 / 19 米軍艦載機延べ約 350 機が呉港を爆撃
- 1945 (s'20) 年 5 / 5 B29 延べ約 130 機が呉市広町方面爆撃
- 1945 (s'20) 年 6 / 22 B29 延べ約 290 機が海軍施設を中心に呉市、安芸郡音戸町を空襲
- 1945 (s'20) 年 7 / 1 B29 延べ約 80 機が呉市を空襲
- 1945 (s'20) 年 7 / 24 米軍艦載機延べ約 870 機が呉市、呉港内艦艇爆撃
- 1945 (s'20) 年 7 / 28 米軍艦載機延べ約 950 機、B29・B24 延べ約 110 機が呉市、江田島村、御調郡土生町の軍事施設工場を爆撃
- 1945 (s'20) 年 8 / 6 広島市へ原子爆弾投下
- 1945 (s'20) 年 8 / 14 御前会議はポツダム宣言受諾し無条件降伏決定
- 1945 (s'20) 年 9 / 2 降伏文書調印 (ミズリー号)

- 1946 (s'21) 年 10 / 15 広島県は、賠償指定工場 (日本製鋼所も含む) への立入禁止、機械・施設の無断持出を禁止。高屋でも日本製鋼所の倉庫内にあった部品やエンジンを無断で持ち出す者が後を絶たなかった。(郷地区の大島氏)

- その後①の南部 (現宮領東地区内) は、県営林業苗圃・酪農組合の放牧場及び採草地になる。
➡その後東洋工業が買収➡マツダ団地を造成➡現在は、大和ハウスがエコノイエ団地を造成

- その後①の北部 (現中島下条地区内) は、1947 (s'22) 年に西高屋中学校が設立され、1949 (s'24) 年東高屋、西高屋両校を廃止し、組合立高屋中学校となる。1954 (s'29) 年東西両高屋村が合併し、村立高屋中学校、さらに 1956 (s'31) 年町立高屋中学校となる。

- その後② (現中島下条地区内の入野川北岸) は、高屋町町営の住宅地になる。その後町営住宅は廃止され、住民は現在石打八幡神社のすぐ横に建設されている市営住宅に入居する。
➡元町営住宅跡地は、現在ゲートボール場など遊休地となっている。

- その後③ (現中島西南地区内) は、現在立入禁止の遊休地。西高屋駅西側の線路下のガードをくぐりぬけると、入野川西岸に鉄道引き込み線用の橋脚の跡が残っている。

- その後④ (現中島日名条地区内) は、1948 (s'23) 年 3 / 27 運輸省に登記移転され、広島鉄道学園西高屋分所 (国鉄バス運転手の教習所、当初は広島鉄道教習所西高屋自動車要員養成所) となる。
➡国鉄分割民営化 (1987)、国鉄清算事業団発足➡国鉄清算事業団は、広島県にこの土地を売却
➡広島県は、学校建設計画を建てる。
➡県立広島中高开校 (2004)。併設型の中高一貫校で近年進学実績は県内公立高校トップクラス。



⑪昭和隧道の話—宮領の古老の苦労話— (2006年7月2日聞き取り)

1、東西に走る鉄道線路（山陽本線）に沿った松山・大畠・宮領の水田地帯の特徴。

- ア) 地下水が高い—沼地が2ヶ所、葦が生えている所もあった。
- イ) 水はけが悪い土地。
- ウ) 田はざぶ田で、膝まで沼り「牛殺しの田」と言われていた。
- エ) 人も牛も苦労して農作業をしていた。
 - ・田の草を取るにも機械は押されず、這ってとった。
 - ・稲刈りは、水の上に置かれないので、田舟を用意した。
その上に刈り取った稲をのせて畔まで担ぎだした。
 - ・細いあぜ道を八八車の通る道まで担ぎだした。
 - ・それから家まで持って帰って脱穀（千歯こき）をした。

2、耕地整理が行なわれた。

- ア) 農家の人たちは交代で働きに出た。
- イ) トロッコ、えんぼう、シャベルで手伝った。
- ウ) 明治44年3月起工。大正2年5月竣工。
総面積 39町5反7背11歩
設立金額 2,3780円6銭5厘
組合長・評議員 15人 組合員 66人（石碑に氏名が刻まれている）

3、昭和隧道建設

原因：毎年梅雨時期や二百十日の頃には大水が出る。川土手が切れる。その度に太鼓や鉦を鳴らして皆を集め、びしょびしょに濡れながら俵やカマスに土を入れて、決壊しそうな所に土を入れた。川の水が田に入ると1週間くらい水が引かない。稲が腐る。砂が田に入る。

経過：○昭和19年 柳田安巳村長の時、当時戦争中であり食糧難で、米の増産事業として、隧道の計画が持ち上がった。

○隧道建設費用の9割は県の補助、1割は駅裏に引き込み線を敷設する費用から捻出した。（太平洋戦争末期、本土空襲のため軍需工場を疎開させる国策で、日本製鋼所の高屋への移転計画が持ち上がり、資材搬入用のプラットホーム建設が必要になった。）地元負担はなし。

○計画では、4m幅で歩道も作る事になっていた。実際は2m幅になる。

○総延長 200m あまり。

○戦争中で、材料のセメントの値段が上がる。上から土砂が崩れる。

○途中で計画が変更されたりした。請負業者も3度変わった。工事中断。

○昭和20年9月に大雨。（枕崎台風）終戦から1カ月後の混乱していた時、実森さんと高山さんの間の南の山が山崩れ（山津波・土石流）し、家が潰れたり畳の上まで浸水した。1町余りの田が全部砂に埋まった。

○川に砂が流れ込み、川床を高くなったので、ますます水害の危険性が高くなった。

○工事が中断していたのだが、早く再開してくれという声が大きくなり、いよいよ昭和23年竣工となった。

結果（その1）：○土手が決壊する心配がなくなった。

○田に溜まった水も非常に速く引くようになった。

○大水にもかかわらず、稲が傷め付けられなくなった。

（聞き取り：井上）

結果（その2） 隧道の出口の中島の人々の思い。

○トンネルを掘ったので、出口近くにあった三つのため池の水が涸れてしまった。

○池から田へ水をひいていたのが、出来なくなった。

○毎年、川からポンプで田に水を入れるようになった。（河床が低い）

○田や池の水ばかりではなく、近くの6軒では井戸水が全部枯れてダメになった。何かあったら補償するということだったが、補償はいまだにない。

○どの家もみな新しく掘ったけれど、勝手から井戸が遠くなって不便を味わっている。

○昭和26年に隧道で落盤事故があった。代用セメントとまさ土を使用したのが原因だ。



○川底に溜まった砂を掘り、河床を低くした。その砂を西條町吉行の家畜保健所の裏山に捨てたり、駅裏へも砂を持って行った。大変な苦勞だった。隧道ができることで利益のあった人と、不利益を被った人がいることを記録しておく。

注) 戦争中の日本製鋼所疎開移転計画の遺産。

- ①現高屋中学校敷地とその周辺の山林を造成し、工場を建設、その真ん中に市道をつくる。
- ②現県立広島中高の敷地にあった 60 枚近くあった水田（湿地・ざぶ田）を半強制的に収容し、埋め立てて工場社員寮とそのグラウンドを建設。
- ③駅南側に資材や原材料搬入用の鉄道引き込み線を建設。

以上のような計画があったが、戦後その開発跡地が、それぞれ

- ①一部町が買い取り中学校敷地として、現在高屋中学校となる。また残地は当分工場の残骸のレンガが多く残っていたが、そこをマツダが購入しマツダ社宅用地になる。現在その一部は住宅団地として様変わりしている。
- ②戦後運輸省が土地を取得し、そこを国鉄バスの教習所用地にする。その後国鉄民営化の際清算事業団が広島県に売却し、広島県のリーディングスクールとして県立広島中学校高等学校を作る。
- ③駅南側は一部町営住宅が作られるが、今は遊休地としてゲートボール場などになっている。駅南側の開発計画があり、南側乗客口ができると聞いている。また引き込み線跡地は入野川に架かる鉄橋の橋脚部分を一部残し、現在も放置されたままとっている。
- ④高屋西小学校運動場の西側に慰霊碑がある。
昭和 28 年 11 月西高屋村建立。太平洋戦争や広島への原爆投下によって亡くなられた西高屋村民約 180 の名前が刻まれている。この慰霊碑の建立には、株式会社日本製鋼所関係者、西高屋村長柳田安巳、西高屋村民一同がかかわったことが記されている。

太平洋戦争中、そして戦争直後の遺産として現在もその当時の面影を知ることができる。その大部分は新しく姿を変えて今に至っているが、戦後の西高屋の出発点であったことだけは確かである。



⑫県立広島中学校高等学校敷地の移り変わり―地域住民の証言から―

1、太平洋戦争前の風景（1941年（昭和16年）以前）

- ①水田と沼地とため池
- ②のどかな田園

2、太平洋戦争中の風景（1941年12月～1945年8月）

- ①約60枚の水田と山林の供出の働きかけがあり、半強制的に収用される。（1943年頃）
- ②約6,900㎡の水田と山林を統合➡（株）日本製鋼所が取得（1944年5月19日）
 - ◎日本製鋼所は、1944年1月18日に軍需会社第一次指定を受ける。
 - ◎日本製鋼所は、広島工場の疎開を始める。疎開先は西高屋村中島。
 - ア) 工場→現高屋中学校敷地、現エコノイエ団地、現タカヤ化成、マツダ団地など
 - イ) 社員寮→現県立広島中学校高等学校
 - ウ) 工場資材搬入用の鉄道引き込み線→西高屋駅南側現市有地
 - ◎山林の土をトラックで運び出して整地する。朝鮮の人々が労働に従事していた。

※1889年（明治22年）中島村、杵原村、稲木村、桧山村、大畠村、宮領村、郷村、溝口村の8ヵ村をもって西高屋村とした。1954年（昭和29年）西高屋村と東高屋村が合併して高屋村となり、翌年1955年（昭和30年）当時の豊田郡小谷村と高屋村が合併して町制をしき高屋町となった。さらに1958年（昭和33年）1月1日造賀村と合併して、現在の高屋町となる。

③時代の波―1944年（昭和19年）から1945年（昭和20年）の出来事―

- ◎1944年6月30日 閣議で学童疎開を決定
- ◎1944年11月29日 B29による東京市街地の無差別爆撃
- ◎1945年3月19日 米軍艦載機延べ350機が呉軍港を爆撃
- ◎1945年5月5日 B29延べ130機が呉市広町方面を爆撃
- ◎1945年7月24日 米軍艦載機延べ870機が呉市、呉軍港を爆撃
- ◎1945年7月28日 米軍艦載機延べ950機、B29・B24延べ110機が呉市、江田島、御調郡土生町の軍事施設・工場を爆撃

④日本製鋼所の社員寮に、岡山第六高等学校生が勤労動員で宿泊する。（約100人）

⑤1945年（昭和20年）8月6日、第六高等学校生数人が広島に行き、被爆。西高屋駅から担架で返ってくるのを近くの住民が目撃している。3名の内1名は西高屋で死亡。（岡山大学同窓会長から聞き取り）高屋の西方にキノコ雲が見えた。

⑥多くの被爆した人が西高屋駅まで列車で運ばれてきた。

⑦1945年8月15日 無条件降伏 太平洋戦争が終わる。

※岡山第六高等学校は、現岡山大学。学校は、昭和20年6月空襲で焼失。昭和25年廃校して岡山大学となる。第六高等学校の敷地には、現在県立岡山朝日高等学校がある。

3、戦後の風景Ⅰ（1945年～1980年頃まで）

①1948年（昭和23年）3月27日、日本製鋼所社員寮の用地を運輸省（現国土交通省）が取得。

日本国有鉄道「広島鉄道学園西高屋分所」が使用。国鉄バスの運転手養成のための教習所ができる。

②地域住民は、教習所のグラウンドを野球大会や地区の行事（とんどや亥の子の宿など）に使用させてもらう。地域に活気がみられる。

③1963年（昭和38年）日本国有鉄道（現JR）が土地を取得。

④時代の波

- ◎1960年代 高度経済成長
- ◎1973年 広島大学西条に統合移転決定、賀茂学園都市構想。石油危機。
- ◎1974年 東広島市発足（西条、八本松、志和、高屋の4町合併）
- ◎1984年 広島中央テクノポリス指定（高度技術の研究機関の集積・高速交通網の整備・大規模住宅団地の開発）
- ◎1987年 国鉄分割民営化決定（中曽根内閣）、国鉄清算事業団発足（国鉄の赤字を引きうける）



4、戦後の風景Ⅱ（1981年～2000年頃まで）

- ①国鉄バス教習所は、向洋に移転
- ②教習所の跡地は、広いグラウンドがあるだけで、自動車教習用コースと建物の廃屋に雑草が残り、殺風景な土地になってしまった。非行グループのバイク音やホームレスの出入りする場所となった。
- ③時代の波
 - ◎山陽自動車道・広島空港・大学や各種研究機関・高美が丘住宅団地の開発。
 - ◎1990年 頭脳立地地域に指定、市内260haの工業団地が整備される。
 - ◎1980年代後半バブル景気と1990年代バブル崩壊による平成不況
 - ◎1995年 広島大学統合移転完了

5、現在の風景（2001年～現在まで）

- ①国鉄清算事業団が広島県に土地を売却
- ②県立の学校建設計画（準備室開設）
- ③2004年4月 県立広島中学校広島高等学校開校
- ④学校の見える活気あふれた風景に様変わりした。
- ⑤2014年5月開校10周年記念。学校の西側の水田も住宅団地になりました。

《学校の近くに住んでいるAさんの話》：2007年（平成19年）聞き取り

昭和16年（1941年）結婚して高屋中島に来られました。昭和18年長男誕生前に、ご主人さんは徴兵され中国へ出兵されました。昭和21年に中国から帰還されて初めて、5歳になる長男の顔を見ることができたのです。

今は医者をしていただご主人も亡くなられ、一人暮らしの生活です。「高屋に来て66年の月日が過ぎました。この間、国に協力しなければという気持ちで土地を供出し、戦争中はみんなひどい生活でした。

戦後は土地が戻ってくるわけでもなく、鉄道学園ができてからは、そこに勤める人たちとも友達になり、少しずつ元気になりました。近所に住みついた人も何人かいました。再び鉄道学園が無くなってみると、寂しいものです。近所の人たちも年をとってきて、一人、二人と亡くなっていき、話をする人も少なくなってきました。

今再び若い子どもたちの声が聞けるようになり、私も頑張らなくてはと思うのですが、もう体もあまり言うことを聞いてくれません。あわただしい人生でした。」

少し寂しそうに話されたのが印象的でした。現在は、息子さんと岡山に住んでおられます。

この学校の敷地にも時代の大波、小波が押し寄せてきました。時代の波は、この土地の風景を眺めている人たちの心の中にも忍び込んできたのです。しかも現在の高屋中学校の敷地やマツダ団地、さらにこの県立広島中高の学校が現在あるのは、太平洋戦争中に軍需会社が高屋に疎開してくるといふ所から話は始まっています。その開発跡が、戦争の遺産として現在別の形で生き残っているのです。

今、君たちも偶然この風景の中に紛れ込んでいます。将来、時代の大波、小波に翻弄されそうになることがあるかもしれませんが、この学校でしっかり学んで、自分の意志を強く持って生きていける人になってもらいたいと願っています。

一つの土地の歴史を調べていく中で、いろんなことが絡み合っているのが見えてきます。教科書に載っていないたくさんの方々のことや人々が、そこで起こったり生活したりしています。そして、その地域の歴史や文化が生まれていきます。どのような地域にも多くのドラマがあります。皆さんが生まれた所にもあります。

ここに住む私たちは、この歴史や文化を学びながら、誇りを持って次の世代の人々に伝えていこうと思っています。これは学校も同じことだと思います。君たちにとって母校はここです。多くの学校があっても母校はこの学校しかありません。君たちが学び育っていく母校の歴史や文化、校風を作っていくのは君たち自身です。誇りを持って学校の歴史作りに参画し、また後輩に伝えて行って下さい。

（注）県立広島中学校2年生の総合学習で「地域を知る」という課題が出されます。

以上は毎年井上が講演する資料の一部をここに掲載したものです。

文責：井上泰秀



⑬大久保ダムと用水路についてと西日本豪雨災害直後の記録

平成 30 年 7 月 18 日

ディスカバー高屋

1、稲木の久保山の麓には、灌漑用の大きなダム湖がある。かつて稲木に住んでおられた水島勇三氏が、このダム湖について書かれた記録がある。以下、その記録を書写しておこうと思う。

「国道 375 号線を造賀方面へ上りかけた西側に、湖面の新緑を映じる大久保ダムがある。その湖岸に大久保ダム記念碑が立っている。その碑には次のように刻まれている。

大久保ダム	
事業名	県営一般灌漑用
ダム形式	アースダム（傾斜コア型）
堤長	170 m
堤高	26 m
満水面積	40,650㎡
総貯水量	255,000㎡
竣工年度	昭和 48 年度
施工者	三井建設株式会社

この大規模なダムを建設するに当たっては、檜村滋美町長並びに地元水利関係者が灌漑用水を確保するため、並々ならぬ努力によって竣工したと聞いている。

尚、ダム建設並びに水路の維持管理等に当たって、次のような協定、規約が結ばれている。

「大久保ダム溜池承水路水利協定書（概要）」

◎杵原及び稲木地区水田灌漑用水を確保するため、杵原川を締切り、大久保溜池を新設するに当たり、本溜池の直接流域が狭小のため、杵原、稲木水利関係者と杵原承水路関係者との間において、将来水利紛争の絶無を期すると共に併せて、農村振興に寄与する目的をもって、両関係者が分譲取水の協定を結ぶ。

「大久保溜池水利協定書（概要）」

◎杵原水利関係者と稲木水利関係者との間において、将来水利紛争の絶無を期するため、分水を杵原分 43,7%、稲木分を 56,3% と定め協定を結ぶ。

「稲木水利組規約（概要）」

◎昭和 57 年大久保ダムの稲木地区水利関係者をもって組合を組織し、幹線水路の維持管理、ダムからの分水に関する事、役員、水路の清掃、分担金等を定める。

毎年、4 月の第三日曜日には、朝 8 時より組合員が出て稲木への水路清掃をしている。

稲木地域は昔から、農業用水に困っていた。何時の時代かは不明であるが、当時の関係者が白鳥山方面の山から大久保山を眺め、山の裾に沿って水路を作れば、大久保山の水を引くことができると考え、今ある水路を作ったと古老は話される。—中略—

昭和 48 年に大久保ダム完成後は、水路も U 字管で整備され漏水もなく、従って水番に出ることなく用水を引くことができ、農家は大久保ダム建設に係わられた方々に感謝している。」

（以上 「古里（稲木）の歩み」平成 17 年 水島勇三 より抜粋）

上記にある稲木と杵原への分水（分水の割合 56,3 : 43,7）については、円筒分水という分土工を利用した珍しい設備によって行われている。大久保ダムは、あくまで農業用の灌漑用水の確保ということが大目的であった。この灌漑用水路は、ダムから稲木に向けて総延長約 3km 以上の山裾を抜けて建設されている。稲木の人々が大切に守られていることに敬意を表します。しかし、平成 30 年（2018 年）7 月の西日本豪雨災害によって、用水路の一部が崩落により破損してしまいました。

大久保ダムからの用水路の略図を以下に記しておきますが、正確ではないことを断っておきます。



2、平成30年7月5日～7日にかけ3日間の降雨量は450mmを超えていた。西日本豪雨災害といわれるこの事態は、土砂災害や洪水災害による家屋の流出や住宅浸水を広範囲にもたらし、特に広島県内の死者は106人、行方不明者15人という甚大な被害をもたらした。東広島市内だけでも、12人の死亡、1人の行方不明者を出している。(7月15日現在)

こうした被害を土地の形状によって類型化して考えてみるとわかりやすい。

◎**土砂災害**とは、山地に降った大雨がもたらす「がけ崩れ」、「土石流」、「地滑り」などをいい、洪積層といわれる山地や丘陵地に多く発生する。特に東広島市では、花崗岩の風化した「真砂土」といわれる西条層が至る所に分布しており、その崩壊が多くの災害をもたらした。

災害が発生する以前には、多くの人が住居を作り、山の木々を燃料としながら切り開き、里山を形成していった場所だ。こうした高台の乾いた土地には、墳墓が多く作られ聖なる土地でもあった。社会的な身分を得た者は、高台の乾いた土地に住み、迫といわれる川の源流にあたる谷間の一番高い所で、水の支配を行いながら村の統治をおこなった。人の力を超える土砂災害は、まさにこの場所で起こったのだ。この地方は、瀬戸内気候という夏も冬も乾燥した気候帯に入っている。丘陵地では、水の確保がむづかしく、多くの溜池を作り管理していかなければならない。大久保ダムは、この目的のために造られたものだ。広島県の溜池の数は、19,609ヵ所あるといわれ、全国で2位の多さである。

この溜池の堤防の強度を、広島県は一昨年調査をした。今回の豪雨で、この調査の信憑性を証明できた溜池は果たしてどのくらいあったか、その結果が楽しみである。

今度の豪雨災害で、西高屋においては特に白鳥山系の北側斜面の崩落・表層崩壊が目立つ。宮領、郷、溝口にまたがり多くの土石流が発生した。特に郷では、土砂が山陽道の壁面を乗り越え、高速道を塞ぎ、通行不能を引き起こした。別所橋と白鳥橋の間で発生。また、別の土石流は、宮領徳前や宮領中組の二カ所で高速道路下横断道(ボックスカルバート)をくぐり抜け、土砂や流木が水田に流れ込んで広範囲の水田に被害をもたらした。もともと高速道の擁壁は、土石流などの土砂崩れを防御するともいわれていたが、不幸にも土石流が起こった位置の下方に、その横断道があったという悲劇である。また、溝口の小寺池に向かって土石流が流入し、電柱をなぎ倒している。車で白鳥神社に登る際の道路は寸断されてしまった。今年の白鳥神社参詣は無理かもしれない。

◎**洪水災害**とは、河川の増水により、堤防が崩壊し、低地に浸水して被害をもたらすものと、越水といわれる堤防から水があふれ出る場合とがある。河川から水が溢れて住宅地や農地に被害をもたらす外水氾濫と住宅地や農地に降った雨がそのまま溜まって溢れる内水氾濫がある。こうした水によって起こされる水害を洪水災害という。

洪水災害は、河川の流域や溜池の周辺で発生する。もともと低地であった場所であり、以前は湿地であった所が多い。こうした湿った土地を沖積層の土地といい、昔から水害が多く発生するところだが、米を生産するという面でいえば食糧供給能力を左右する大切な場所である。かつては共同体の富の鍵を握っているところでもあった。

しかし近年では、この低地一帯に多くの住宅団地の造成や工場建設が行われたため、かつての水田が埋め立てられてきた。貯水池としての機能も持っていた水田が、今や一面コンクリートとなってしまい、降った雨水は直接河川に流入するという事態に変わってしまった。河川の流量能力を超える雨量は、どの河川であっても氾濫がいつ起こっても不思議ではないという状況を作り出している。

西高屋では、宮領を流れる入野川の河川堤防が決壊し、大島側の水田に流入し、被害をもたらした。また、西高屋地域センター横の入野川の水が越水し、駅前一帯に浸水被害をもたらした。一時、駅前の通行は不能となり、多くの車が水没した。さらに、杵原川の支流の正原川も越水し、正原川沿いの杵原正原地区と中島日名条地区の家屋床下浸水の被害が出た。この正原川の氾濫は、高美が丘3丁目西の調整池の水量が上がり、放流した結果と、中島の溜池(通称カツラ池・カミノカワ池)の放流が重なり、周辺の道路に水が溢れ、被害をもたらしたものと思われる。さらに、杵原川の流速に正原川の水が押し戻され、正原川の水が逆流して越水したという見方もある。

3、以上は、今回の豪雨災害のほんの一部にすぎないが、自分たちが住んでいる地域で起こった小さな災害も含めて、その記録を後世に残していかなければいけないと思っている。7月18日「大人の遠足」の資料の中の地図に、災害の箇所を記録しておくグッドですね。

私たちが遠足で歩いているのは、その土地の高低差や傾斜地の危険さ、危険箇所や安全な場所を实际歩いてみて実感するというとても貴重な体験をしているのだ、ということを忘れないでください。

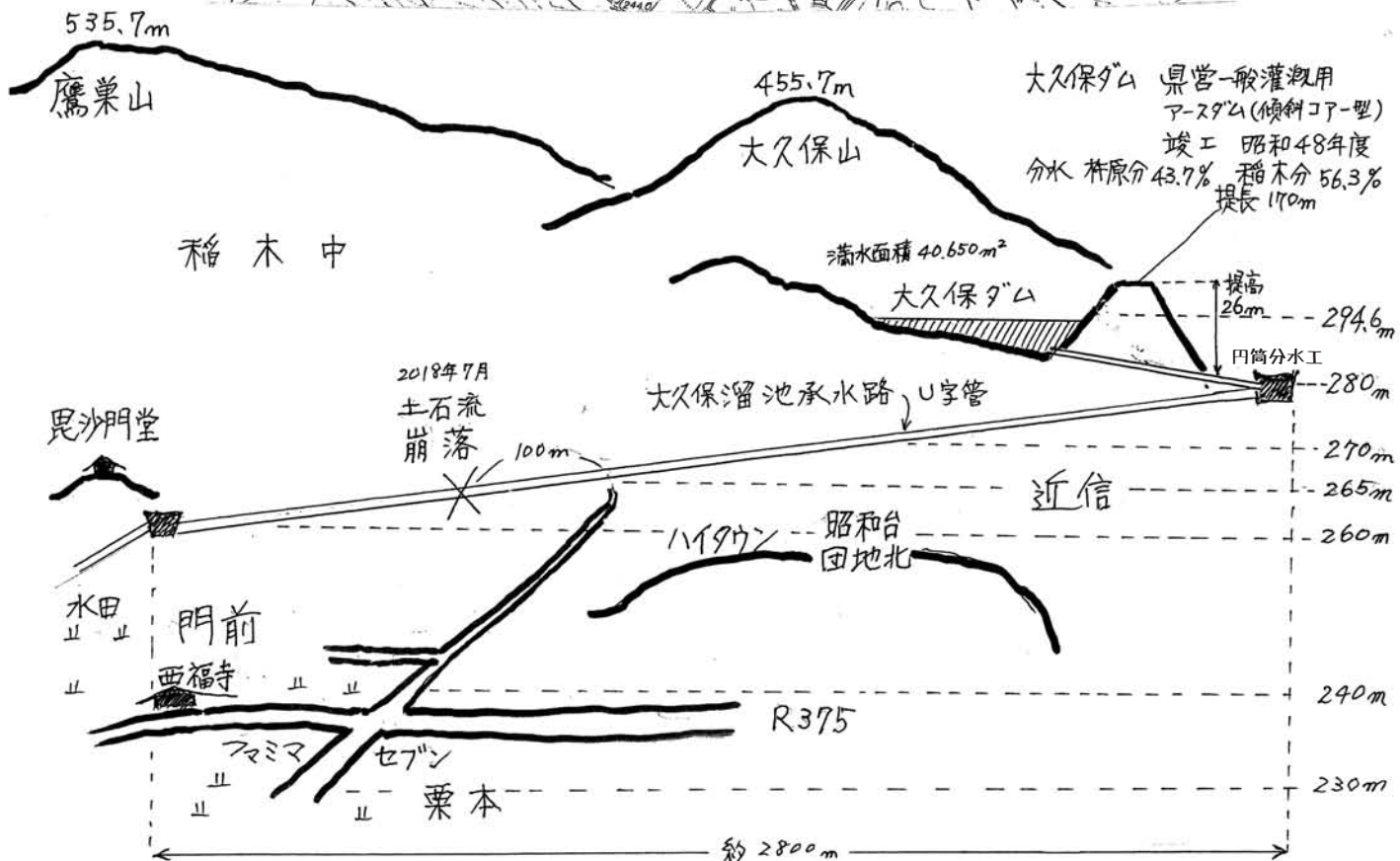
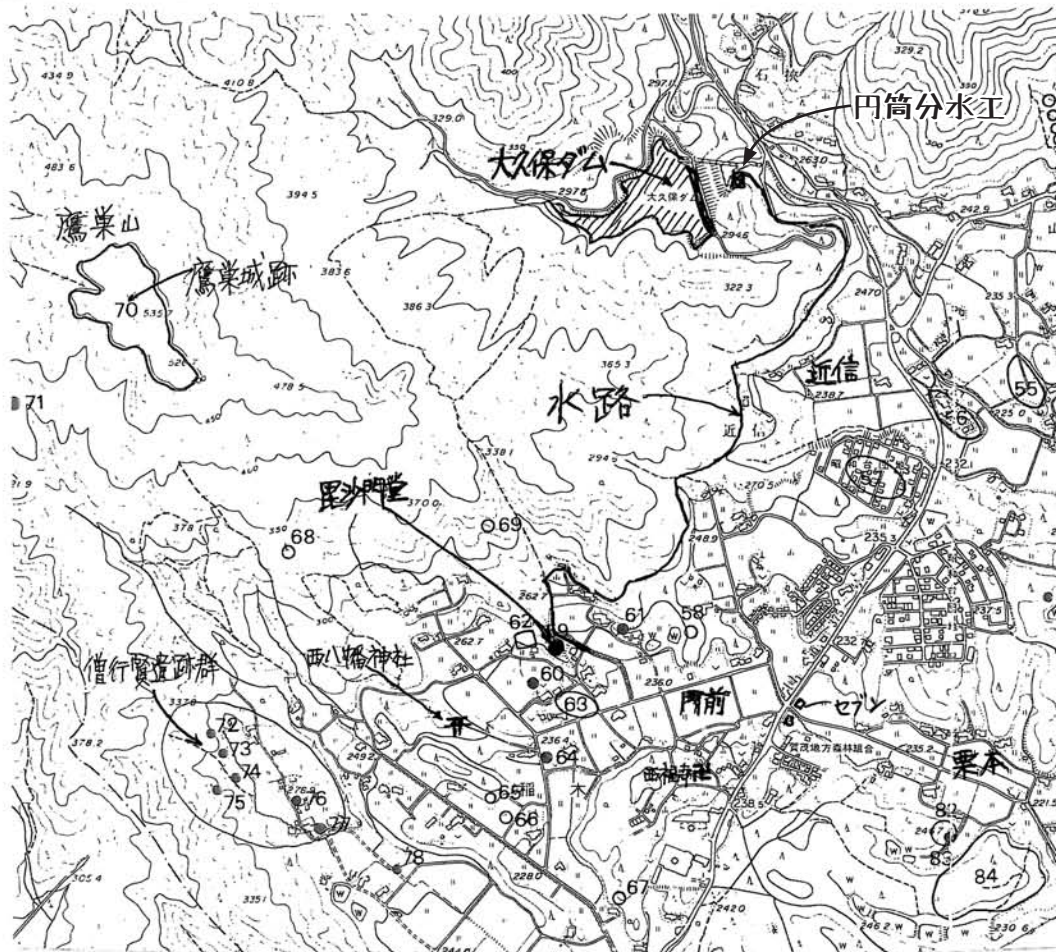
文責 井上泰秀



大人の遠足

稲木 大久保ダム承水路を歩く

2019.4.17





おわりに

高屋には、古代以前より多くの人たちが住んでいました。特に中世のかおりは今でも強く残っている地域です。詳しい歴史を知らなくても、戸外に出て歩くことで新鮮な発見がきっとあるはずです。

このたび作製したこの小冊子を片手に、いろんなコースを組み合わせながら健康的な散歩をしていただければ、制作者としてこれに過ぎたる喜びはありません。

多くの制約の中で、さしあたりこのような形ができましたのも、一緒に歩きまわったディスカバー高屋の皆様と高屋西地域センターの長谷川さんのご協力のおかげであります。まだまだご紹介したいコースや史跡巡りは、高屋にはもっとたくさんあります。今回は西高屋の限られた10コースのみの紹介になりましたが、高屋をもっと知ってもらい、親が子に、お爺さん・お婆さんが孫に古里の素晴らしさを語り継いでいくきっかけになれば幸いです。

本誌の編集には、「藝藩通志」、「廣島縣神社誌」、「廣島縣の標柱」、「高屋町誌」、「賀茂郡志」、「賀茂郡史」、「東広島の歴史事典」を参考にさせていただきました。また記録した写真の製版や編集の際は、高屋西地域センターのご協力によるものです。ここにあらためてお礼を申し上げます。

最後になりましたが、本誌の製作にあたり、東広島市の「平成25年度市民協働まちづくり活動応援補助金」と近畿大学工学部をはじめ多くの市民の方々からの御寄附がもとになっています。また高屋西小学校区住民自治協議会の役員の皆様の暖かい応援がなくてはここまで来ることができませんでした。

ここに皆様方に心からお礼を申し上げます。

2014年（平成26年）3月

復刊にあたって

平成26年3月に発行された「ふるさと西高屋を歩く」は、多くの方々の手元に置かれ、有効な活用がなされていると聞き、とても喜んでいました。

さらに、ここに至り高屋西小学校区住民自治協議会には、復刊の御要望が様々な方面から寄せられているという、予想さえしていなかった事態が生じてきました。

制作者としては、「たかや発見」、「たかや発信」という当初の計画をより推し進めるためにも増刊を、と思っていたところ、当住民自治協議会はこれを快く引き受けていただきました。

この復刊がなったのは、当住民自治協議会の役員、各自治会長の多くの皆様の御蔭であります。

記して感謝申し上げます。

2016年（平成28年）12月

改訂版発行にあたって

古里の史跡や伝承を発見しようと「大人の遠足」を高屋西地域センターの主催講座として始めたのが、2011年（平成23年）6月でした。また、「ふるさと西高屋を歩く」を発行して5年が経過しました。

この間、多くの資料や記録が集積しました。今回、その中の一部を掲載することで、この本を手にする方たちの一層のお役に立てればと考え、改訂版を発行することになりました。親が子に、祖父母が孫に語り聞かせる「古里の語り部」が多く生まれることを今も期待しています。

高屋西小学校の6年生には、西高屋の思い出を一層深いものにしてもらいたいとの思いから、この「ふるさと西高屋を歩く」を卒業生全員の贈り物として高屋西小学校に寄贈させてもらっています。

この改訂版の発行に際しては、高屋西小学校区住民自治協議会の皆様のご支援なくしては叶うことはできませんでした。ここに紙上を借りて感謝申し上げます。

2019年（平成31年）2月

ディスカバー高屋 代表 井上泰秀
(高屋西小学校区住民自治協議会副会長)



改訂版第4版発行にあたって

古里の史跡や伝承をウォーキングしながら発見してみたいという思いから始めた「大人の遠足」が、既に10年を経過しました。毎月2回（第1・3水曜日）の遠足で、その間高屋町はもちろんのこと、東広島市内の各町や周辺の市町をも歩き続けてきました。それぞれその地域の歴史を訪ね、時には川をめぐり、ある時は山城を目指して登山をしたり、四季折々の草花を愛でながら童心にかえる日々でした。仲間とともに歩き続けた10年でしたが、今振り返ると昨日、今日の出来事のように鮮明に思い出されます。

この10年間に訪問した各地域の歴史や出来事を記録した資料が、今や山のように積み重なっています。これらの資料をいつの日にかまとめて、公表できる機会が来るまでは、仲間とともにもう少し頑張っ歩き続けなければならないと思っています。

さて、このような私たちの活動を時あるごとに励ましていただいている高屋西小学校区住民自治協議会の坂田会長をはじめ脇坂高屋西地域センター長と事務局の皆様には、本当にお世話になっております。この紙上をお借りして感謝申し上げますことをお許しいただきたいと思ひます。

また、このたびは第4版の発行を坂田会長、脇坂センター長が後押しして下さり、ようやくの思いで実現することができましたことを皆様にご報告いたします。

2021年（令和3年）2月

ディスカバー高屋 代表 井上泰秀
（高屋西小学校区住民自治協議会副会長）

ディスカバー高屋の会員（順不同）（2021年現在）

井上泰秀	吉田泰義	坂本智恵子	近藤洋子
桃井直子	上田光子	升谷富子	佐藤保雄
栗原希代士	蔵楽知昭	小川信子	本橋景子
桃井義輝	西本嘉住	大森美寿枝	橋本園江

ふるさと西高屋を歩く

2014年（平成26年）3月 初版発行
2016年（平成28年）12月 第2版発行
2019年（平成31年）2月 第3版発行
2021年（令和3年）2月 第4版発行

監修者 ディスカバー高屋
発行者 高屋西小学校区住民自治協議会
印刷 山脇印刷株式会社

西高屋航空写真

2017年（平成29年）撮影



（東広島市写真提供）

